

# 第4回 保育所保育実践研究・報告集

平成 22 年 6 月

- 研究奨励賞
- 実践奨励賞



社会福祉法人 日本保育協会

## はじめに

保育所に対する地域の要望は様々であるが、子育ての専門機関、専門の職員が常駐する場所は地域では保育所において他にない。

保育所における日々の保育実践の中から課題を見つけ、複数の職員の手でそれを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善することが保育の質を高めることに繋がる。

この「保育所保育実践研究・報告」は、「研究論文」と「報告と考察」の2つの方向性により、保育者の実践について募集したものである。第4回目を迎え、各県支部のご協力により14件の提出をいただいたことに感謝申し上げます。また、業務多忙の中、応募された皆様に対し、敬意を表する次第である。

なお、この事業はあくまで保育実践の研究・報告について募集したものであり、各園における保育内容の評価を目的としたものではないことを申し上げます。また、本報告は紙面の都合上、入選者のみ掲載としたことをお許しいただきたい。

今後更に検討を加え、第5回の募集要綱を準備しつつある。より充実した内容の発表を期待し、併せて積極的な保育研究を行っていただくことを願うものである。

平成22年6月30日

「保育所保育実践研究・報告」企画審査委員会

## 第4回「保育所保育実践研究・報告」事業の概要

### 1. 目的

日本保育協会では、保育士の専門性の向上のために、今日的な課題と日々取り組んでいる保育実践に関する研究・報告を募集します。

応募いただいた研究・報告は企画審査委員会での審査を経て表彰し、発表会や報告集で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

2. 主催 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 対象 日本保育協会会員保育園（個人研究、保育園内グループ研究等）

### 4. テーマ

#### (1) 課題研究

- ① 乳児の保育について（人との関わり、離乳食、睡眠等）
- ② 配慮が必要な子どもの保育について
- ③ 食事・食育に関する取り組みについて
- ④ 遊びと環境について（日常の保育の中から）
- ⑤ 保育園の保健活動について（疾病・感染症等の予防、健康増進等）
- ⑥ 保育園の事故防止について
- ⑦ 地域伝承を通じた取り組みについて（遊び、物語、歌、料理、祭り、玩具作り等）

#### (2) 自由研究

- ① 保育園での実践事例（地域の子育て支援や遊びの指導、虐待や発達障害の問題等）
- ② 保育園（地域）での調査研究など

### 5. 執筆要領

- (1) 原稿は学会・保育団体・専門誌等に未発表のものに限ります。
- (2) 原稿はパソコンで作成し、A4判横書き12ポイントで1枚を40字×40行（1,600字）とし、5枚（8,000字）以内を厳守してください。
- (3) 別紙の研究の要旨を1部、印刷した本文を3部お送りください。あわせて同様の内容を保存した2HD（WINDOWS）のフロッピーをお送りください。
- (4) 図・表・写真は挿入箇所がわかるようにして、お送りください。（字数には含みません。）
- (5) 原稿の返却はいたしません。また、募集要綱の目的以外には使用しません。
- (6) 審査委員会において選ばれた原稿については、研究・報告集に掲載いたします。その際の著作権は日本保育協会に帰属します。

## 目次

はじめに

### 1. 入賞作の紹介 .....1

#### (1) 研究奨励賞

〈課題研究部門〉 .....3

- ・ 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『食育を通して育む思いやりの心—地域ぐるみで進める食育活動—』  
大宜見 正代（愛心保育園・沖縄県）
- ・ 課題研究⑦ 地域伝承を通じた取り組みについて  
『地域伝承を通じた取り組みについて』  
中積 智子（山鳩保育園・京都府）

〈自由研究部門〉 該当なし

#### (2) 実践奨励賞

〈課題研究部門〉 .....21

- ・ 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『食事・食育に関する取り組みについて』  
足立 由希子（山鳩保育園・京都府）
- ・ 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『豊かな感性を育む食』を目指して』  
佐藤 郁子（いちご保育園・長崎県）
- ・ 課題研究④ 遊びと環境について  
『遊びと環境について—集団遊びを通して協調性を培う—』  
清水 優梨奈（明星保育園・長野県）
- ・ 課題研究⑥ 保育園の事故防止について  
『保育園の事故防止について』  
松本 留美（山鳩保育園・京都府）

〈自由研究部門〉 .....51

- ・ 『いつきへの憧れ—ももの友達関係を育む大きな一歩—』  
串原 綾香（明星保育園・長野県）

#### (3) 報告奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究① 乳児の保育について

『乳児の保育について』

山下 沙苗 (山鳩保育園・京都府)

- ・ 課題研究② 配慮が必要な子どもの保育について

『配慮が必要な子どもの保育について』

倉谷 教子 (山鳩保育園・京都府)

- ・ 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『栄養士の子育て支援』

小町 直宏 (西東京市立みどり保育園・東京都)

- ・ 課題研究④ 遊びと環境について

『自発的な集団遊びに向けて—おままごとを通して—』

手塚 千佳 (秋和保育園・長野県)

- ・ 課題研究④ 遊びと環境について

『遊びと環境について』

西濱 裕子 (山鳩保育園・京都府)

〈自由研究部門〉

- ・ 『保育現場におけるカウンセリングアプローチの試み』

廣田 敬乃 (中居林保育園・青森県)

- ・ 『心と心のふれあいを深める思いやりの輪—思いやりを引き出す関わりを通して—』

玉城 久美子 (第2 愛心保育園・沖縄県)

※ 報告奨励賞 (7件) については、掲載しておりません。

## 2. 総評及び講評 .....57

総 評.....59

委員長 野 坂 勉

講 評 (作品別) .....60

「保育所保育実践研究・報告」企画審査委員会

委員長 野 坂 勉 (大正大学名誉教授)

藤 澤 良 知 (実践女子大学名誉教授)

小 林 芳 文 (和光大学教授)

庄 司 順 一 (青山学院大学教授)

菊 地 恵 子 (白河かもめ保育園園長)

渡 辺 信 行 (泉ヶ丘保育園園長)

井 桁 容 子 (東京家政大学ナースリールーム主任)

久 野 順 子 (つくしんぼ保育園主任)

---

# 1. 入賞作の紹介

---

## (1) 研究奨励賞

### <課題研究部門>

課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『食育を通して育む思いやりの心—地域ぐるみで進める食育活動—』

大宜見 正 代 (愛心保育園・沖縄県)

課題研究⑦ 地域伝承を通じた取り組みについて

『地域伝承を通じた取り組みについて』

中 積 智 子 (山鳩保育園・京都府)

### <自由研究部門>

該当なし



### 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて 『食育を通して育む思いやりの心～地域ぐるみで進める食育活動～』

沖縄県・愛心保育園主任保育士 大宜見 正代

#### 1. はじめに

食べることは、生きることへの源であり、心と体の活力と発達に密接に関係する。食べることによって子ども達の身も心も健やかに育ていけると言う思いを込めて当園では、下記の事柄を目標に掲げ取り組んでいる。

- ① 子ども達が楽しく食事ができるように、子どもの視点にたった環境を整える。
- ② 正しい食生活を身につけさせる。
- ③ 友達と会話を楽しみながら食べることの喜びと、活動への意欲につなげていく。
- ④ 果物や野菜など、子ども達や保育者、地域の人々（愛心通り会ふれあい農園）と共に一緒に育て収穫の喜びと新鮮な食物を味わう。

このような目標に沿って、子ども達がいきいきとした活動へ展開できるよう取り組んでいる。そのような中で食に対する興味や関心、食事のマナー、感謝の気持ち等が着実に子ども達に芽生えてきた事を実感している。そして、これからも、より良い食育を進めていくために昨年の課題である調理員との交流を更に深めながらより一層、食育活動を充実させていきたいと思う。その中で愛する子ども達の思いやりの心を育てながら身も心も豊かな子どもの成長へとつなげていきたい。そのような願いを込めて現在取り組んでいる状況を報告したいと思う。

#### 2. 保育園の概要

名 称：社会福祉法人 玉重福社会 愛心保育園

設 立：昭和58年4月1日 開園

所在地：那覇市上間384-15番地

定 員：80名 現員93名（10月現在）

年 齢	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児	現員	定員
人数	12	17	17	17	21	9	93	80

○現在実施している特別保育事業

- ・延長保育（午後8時迄） ・子育て相談事業（自主事業）
- ・一時保育 ・障害児保育 ・子育て支援センター愛・愛（自主事業）

○地域活動事業として

- ・育児講座 ・異年齢児交流 ・世代間交流 ・郷土文化伝承活動等

○愛心児童クラブ

### 3. 目的

- ・「喜んで楽しく食べる子ども」に成長するために、食べる意欲を育みながら食事の大切さを伝える。
- ・各クラスのテーマを掲げ活動計画を充実させる。
- ・果物や野菜などを、子ども達や保育者、地域の人々も一緒に育て収穫の喜びと地域との交流を深める。

### 4. 実践の内容・経過

各年齢別による取り組み

- ・0歳児（テーマ：食に対する意欲を育む）

0歳児は、集団での生活を初めてする子がほとんどです。新しい環境の中で安心して子ども達がゆったりと一日を過ごし、ミルクを飲んだり、離乳食を喜んで食べられるように、4月の個人面談では、家庭での授乳の仕方やミルクの確認、母乳育児の子は「冷凍母乳」を持参してもらうこと、哺乳瓶と乳頭の種類等を確認したり離乳食を進めるうえで大切な事を話し合います。又、食物アレルギーのある子に対しては、医師からのアレルギー検査票を提出してもらい、保護者、調理師、保育士と三者で共に話し合いを持ちながら、除去食を進めていく中で食後の体調変化等をしっかり観察しています。



おいしょいしょう？いっばいのでね！



美味しお食事いただきます！



自分で食べられるよ！

- ・1歳児（テーマ：なんでもよくかんでおいしく食べよう!!）

新年度の4月当初の1歳児は食べ歩きや食後のあいさつをする前に立って歩く姿が多くみられたが、テーブルクロスをかけ、散歩で見つけた草花を飾り、食事の雰囲気づくりを始めると、テーブルの周りに自然と集まりイスにこしかけて食事を心待ちにする子ども達

の姿に環境を整える大切さを感じた。

又、当初は野菜を見ると、顔を背けたり、お皿から省くなど食わず嫌いな子どもも多くみられたが、食前に食材の紹介をすると「ニンジン」「きゅうり」など、野菜の名前を保育士の後から口ずさみ、興味を示してくれるようになった。そしてかみかみしながら、おいしく食べようねと話すと「お野菜食べる～」と自ら得意気に話すようになり食べてくれるようになった。



「この野菜の名前は～？」と聞くと元気よく答えてくれます。



奇麗なお花を飾って、美味しいお食事をいただきます。



トマトさん大きくな～れ

### ・ 2 歳児（テーマ：心で感じ表現する食事・味覚を知る）

2歳児ともなってくると、自分の思ったことや感じたことを言葉や表現で表すようになります。普段の生活で「痛い」と声を震わせて泣きそうな顔をするように、食事の面においても、酸味のきいた食べ物を口にすると「すっぱい」と認識して、相手にそのことを表現し伝えようとします。又、感じる味が酸味だけでなく「おいしい」という笑顔満開の顔等、他にも色々な味を賞味する事で、心で感じたことを表現する事を知ってもらい、いろいろな味覚があることを今後も伝えていきたい。



苦い顔はどんな顔かな!?



レモンを食べて「すっぱ～い」顔の子ども達



みんなでがんばって育てるぞ!!

### ・ 3 歳児（テーマ：おいしい食事をみんなで楽しく食べる）

当番活動の一環として、毎日子ども達がエプロンと三角巾を着用し、配膳の手伝いを行っています。配膳する前に今日のメニューの紹介や食材の名称、3つの栄養素の仲間分けやその働きを分類表と照らし合わせて確認させると、みんな興味しんしん、食材に触れたりその食材の彩りにも関心を示すようになり残さず食べるようになった。

尚、栽培活動として、かいわれ大根の種をまいて育て、その収穫の喜びを経験した子ども達ですが、それを味噌汁の具に入れてもらおうと、「あっ！ちょっと苦い～」「でも、おいしいよ」といいながら、喜んで食べてくれました。



かわいれ大根の種植え



芽がでてきたよ♪



味噌汁に入れてもらい、美味しく食べたよ♪



#### ・ 4 歳児（テーマ：元気な命のパワーをもらおうぞ！）

ゆったりとした曲を流しながら、落ち着いたレストランのような雰囲気作りを心掛け、食事のメニューにどの食材が使われているのかクイズにしてみたり、どの国のメニューなのかを知らせたりして子ども達が食に対してより一層興味関心が持てるようにしています。更に、月2回のバイキングは子ども達に大人気、いいにおいに誘われて調理室をのぞき「やったー！今日はバイキングだよ〜」と、心はずませる子ども達。幸せそうに眼を輝かせながら頂いています。



自分で好きな量をとります！



水菜の植え付けをしました！早く大きくな〜れ



#### ・ 5 歳児（テーマ：楽しく食べる元気な子）

野菜や果物を育てて収穫する喜びを味わったり、調理してくれる人や、まわりの人々にも感謝の気持ちを持たせるように育む。そして、みんなが楽しく食べて元気な子に！成長するように目標に添って、テーマを決め食育を進めています。

園では、プランターになすやミニトマト・つるむらさき・オクラ・その他色々な種類のハーブ等を植えています。又、園庭には、みかんやアセロラ、レイシーなどの果物が枝もたわわに実ります。そのような食育を育む環境の中で、色々な野菜や果物の木に花が咲き、実がみのることを見て触って確かめ体験することができます。それはまさに生きた学習となっています。そのような中、皆で水かけを交代しながら自分達で育てたい！という意欲が感じられ、毎日いろいろな発見があり喜びの報告が聞かれます。

又、愛心通り会の地域の協力を得て保育園の近くに念願の「愛心保育園・第2愛心保育園・愛心通り会ふれあい農園」ができ、畑いっぱいゴーヤーやヘチマがぶらさがっているのを見て、子ども達も大喜びで「すごい！すご〜い！」と歓声をあげて収穫しました。みんなで天ぷらにして、おやつに頂くと「ゴーヤー苦い〜苦手〜」と言っていた子どもも

自分達で収穫したゴーヤーは格別な味のように、友達と一緒に喜んで食べてくれました。その他に、ニラ・ネギ・ヨモギ・しそ・ピーマン・なすび・オクラ・プチトマトなどを育てており農園は今や、子ども達の遊び場、また散歩コースとして地域の人々とのふれあいの中で思いやりの心を育む大切な場所として親しまれています。又、畑の側に置いてあるドラム缶の中には、おたまじゃくしやカエルがたくさん泳いでおり、そのような配慮も地域の人々の子ども達に喜んでもらうための温かい心づかいであることに感謝しています。子ども達は、そのさりげない愛情を地域のみなさんから頂きながら、小さな生き物にも関心を示し、その成長を間近で観察できるなど地域との触れ合いや自然の中で多くの体験を通し学び楽しんでいきます。



愛心ふれあい農園



ゴーヤーを収穫しました。広い農園には野菜がいっぱいです!!

## 園全体としての取り組み

園全体の取り組みとして、今年度は食育班（元気もりもり会）を中心に紙芝居による3つの栄養素の話、バランスよく食事をする事の大切さを子ども達に伝えてきました。そして、いつも美味しい食事を作ってくれる調理の職員への感謝をこめて、教室に招き自己紹介やお礼の言葉を述べる等、楽しい交流会をもちながら調理員と一緒におにぎり作りも体験しました。

又、地域の愛心通り会のふれあい農園で子ども達と一緒に野菜作りをしている永山さんを招いて農園の様子や野菜作りの話「野菜いっぱい食べる子は先生達のように優しい心になれるよ」という心温まる話をしてもらい交流を深めました。



調理の先生を紹介しています。子ども達も興味をもって聞いています。



地域の方をお招きして、ふれあい農園の紹介や、子ども達と触れ合っています。



## 5. 考察

食育班（元気もりもり会）の食育活動を通して、子ども達は毎日の献立に使われている食材にも興味関心を深く示すようになってきた。又、2歳児から当番活動で食事を頂く前に、毎日食材の名前を1つ1つ紹介したり、栄養グループ表を使って、赤・緑・黄色と栄

養素のグループ分けをしたり楽しんで取り組む姿が見られ、好き嫌いする子もずいぶんへってきたことを嬉しく思う。又、栽培活動を通して、土との触れ合いや、野菜作りに興味を持ち家庭でも親子で菜園作りを楽しんでいることも、保護者のおたより帳を通して知ることができて喜んでいる。

#### ・調理員とのふれあい効果

食事に対してこれまで以上に興味を持つようになってきた子ども達は、調理室をのぞいては「〇〇せんせ〜い」と親しみを込め名前を呼んだり「今日の給食は何?」「今日もおいしかったよ、ごちそうさま」等と感謝の言葉がたくさん寄せられ調理員と子ども達とのコミュニケーションの和がより深くなってきた。又、食育班（元気もりもり会）の活動の中で調理員も保育室に入って一緒におにぎり作り等を指導する中から、子ども達の名前を自然に覚え、お互いに会話を楽しんでいる様子がうかがわれ、保育室と調理室の距離間が更にぐんと縮まった。

#### ・保護者への効果

保育園の玄関先に子ども達の人気メニューレシピを掲示し、保育園や農園でできた季節の野菜や果物、更には給食やおやつサンプルを展示していますのでお迎えの際に親子で一緒に覗き込む姿もよく見られます。尚、子どもに誘われて、帰り道に愛心ふれあい農園を覗いて、子ども達の植えたサラダ菜や水菜などの観察も日課となって楽しみにしている保護者も増えてきている。

その中で、保護者の方も地域の方々とあいさつを交わしたり、野菜の育て方の情報を共有したりとまさに食育を通して地域ぐるみで温かい心の交流がもてるようになってきたことは大きな成果と言える。

## 6. まとめ

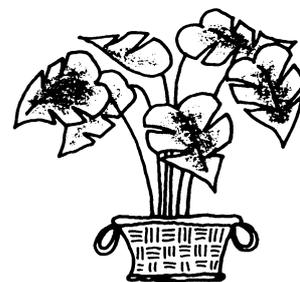
当園がこれ迄取り組んできた食育は、取り組みがなかなか進展せず、花や野菜の栽培のみになって終わっていた。その事をふまえ、今年度は特に食育に力を入れるために食育班（元気もりもり会）を立ち上げた。又、地域の協力を経て愛心ふれあい農園も誕生した。各クラスでは、それぞれにクラステーマを掲げて、年齢に添った食育活動を展開した。更に子ども達は、ふれあい農園でできたゴーヤーやへちまの収穫を楽しんだり、野菜の苗の植え付けを一緒にすることで地域の方々と心の結びつきがかなり深まっている。そのような中で、子ども達から進んであいさつを交わしたり、地域の方々からも子ども達へ「サラダ菜と一緒に植えようね」と栽培への誘いの言葉をかけてもらうなど食育活動を通して地域との連携が深まってきたことは、まさに「手伝う、励まし合う心」「助け合う心」「ありがとうの心」そして「感謝」の気持ちが、みんなの心をほんわかと包んでくれている。

## 7. 課題・反省

- ①クッキング体験活動を充実させ、子ども達の食に対する、興味・関心をさらに広げていく。
- ②地域の方々を招き、一緒にもちつきやムーチー作りなどを楽しみ、地域との交流の場を深めていく。
- ③保護者の食育に対する関心度は高いが、食事のサンプル展示やレシピの掲示を見ていない保護者もあり、今後情報提供に力を注いでいきたい。

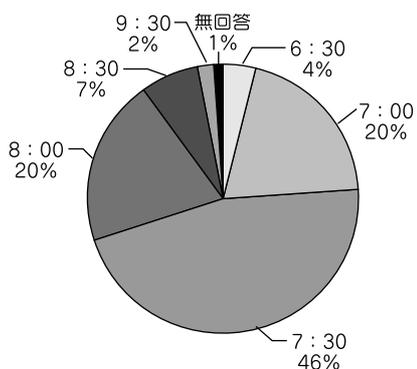
## 8. これからの取り組み

子ども達にとって食事は身も心も大きく育むための大切な命の源であることを再認識し、さらに、食べることの楽しさは「心のゆとりと人を思いやる優しさを同時に育む」ことができることを知り、みんなと一緒に食べる事で食事を作る人や農家の人々に感謝の心を育む事ができる。それらのことが、「人との信頼関係を築き思いやりの心」へとつながる。又、食育についての取り組みはまだまだ十分とは言えないが、今後さらに職員、保護者、地域の人々との連携を密にしながら、子ども達の健やかな育ちに向けて愛情に満ちた食育への取り組みに更に力を注いでいきたい。

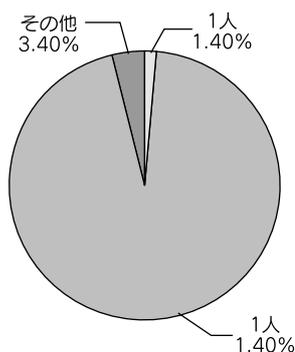


食育を通して育む思いやり（保護者アンケートより） 平成21年10月実施

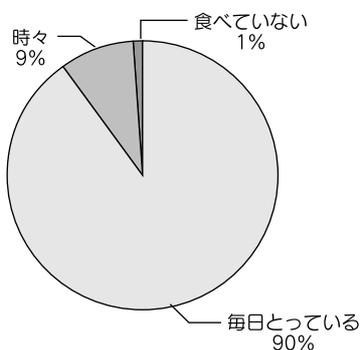
1. 朝食は何時頃ですか？



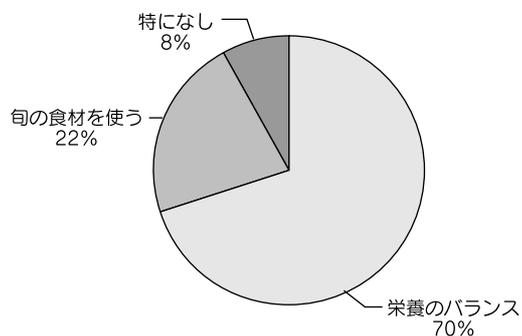
2. 朝食は誰と食べていますか？



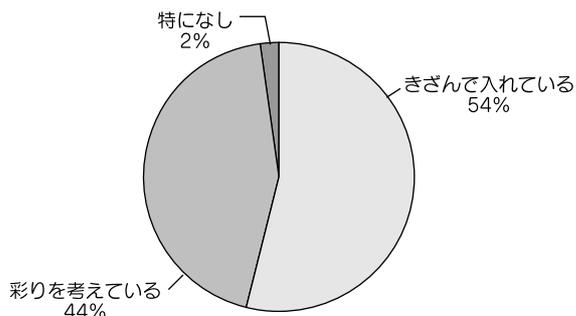
3. 毎日朝食をとっていますか？



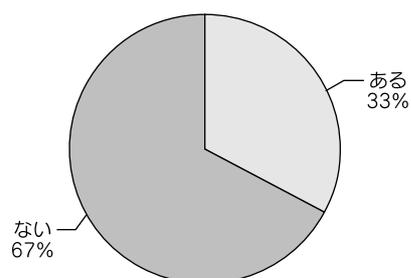
4. 食事を作る際に、どのような事に気をつけていますか？



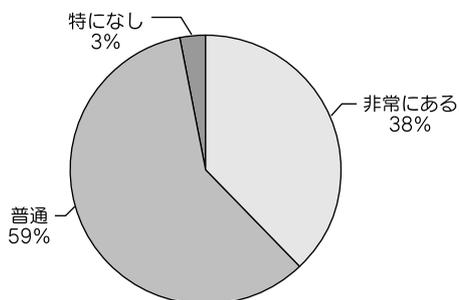
5. 子どもの苦手な食材を入れる際、どのような工夫をされていますか？



6. 食について悩みがありますか？



7. 食に対して興味や関心がありますか？



どのようなものに興味や関心がありますか？

- ・安全、安心な食材選びや調理法、盛り付けかた
- ・成長期の栄養や食事のバランス
- ・子どもから、大人まで喜んでもらえるようにレパートリーを増やし時短で作れるレシピ
- ・食事の手伝い



園庭に実ったレイシー狩り



保育園で収穫できる果物・野菜・薬草



シークワーサ



なすび



いもかずら



ニガナ



つるむらさき



モロヘイヤ



ジャボチカバ



ペパーミント



青ハンダマー



マンジェリコ



なすび  
さつまいも



ジャボチカバの実



パパイヤ



シークァーサ



いがぐり

このように、ふれあい農園や園庭にて収穫された果物や野菜を棚や玄関に展示して保護者や子ども達にいつでも見られるようにしています。

## 課題研究⑦ 地域伝承を通じた取り組みについて 『地域伝承を通じた取り組みについて』

京都府・山鳩保育園 中積 智子

我が園は以前からグループ活動があり、それぞれが活動しています。昨年より「研修グループ（音楽・体育・造形・絵本・食育・遊び）」の6グループとなり、毎週火曜日の活動が定着、その絵本グループ活動の時、地域伝承を通じた取り組みについて研究しようというきっかけになったのは、子ども達が普段読んでいる絵本です。地図を見ながら「ぼくたちの住んでいる八幡ってどこなん？」という疑問からはじまり、子ども達は自分達の住んでいる地域について、もっと知りたいという思いがふくらんでいきました。そして洞ヶ峠の話へとつながっていったのです。八幡市の東の方に位置する洞ヶ峠には、昔からおばけがでるといふ伝説があり、4、5歳児の子ども達にその話をすると、色々なつぶやきが聞こえてきました。そのつぶやきを集めてお話にしました。「ほらがとうげのおばけのかみさま」はじまりはじまり。



① ぼくたちの住んでいる所は、京都府八幡市というところだよ。おとなりは、大阪府枚方市というところだよ。ちょうど八幡市と枚方市がぶつかるところに「洞ヶ峠」というところがあるよ。洞ヶ峠には、むかしむかしから「おばけがでる」というお話があるんだよ。そこは、むかし木がいっぱいあって朝でもお昼でも真っ暗な所だったとき。そしてこの「洞ヶ峠」でお侍さんがたくさん戦いをしたんだって。だからそこで死んでしまったお侍さんが幽霊になったのかなあ？そして、雨の日あそこを通ったタクシーに髪の毛の長い女の人がびしょ濡れの裸足で乗ってきたんだって。運転手さんはとても怖かった。いつの間にか女の人はいなくなって車の中が濡れていたというお話をばあちゃんから聞いて怖かった。ちょっと怖いけど、ぼくたちの大好きな絵本「おばけでんしゃ」に乗って「洞ヶ峠駅」まで行っておばけに会いに行くことになった。ガタンゴトンガタンゴトン。「次は洞ヶ峠駅」洞ヶ峠のおばけがいっぱいだよ。紙芝居がいよいよはじまりはじまり。（これは紙芝居）

洞ヶ峠の昔の伝説から始まった子ども達の話は、自分の好きなおばけ一番恐そうなおばけ、可愛いおばけ、友達になりたいおばけと色々なイメージをふくらませ、どんどん自由

に描いていきました。描いている中で、「わあ こんなおばけがいたらみんな絶対泣いてしまう 怖すぎる」「こんなおばけなら一緒に遊びたいなあ」「世界一小さいおばけ」「このおばけは優しいおばけでこのおばけは強いおばけ」と自分でお話を作り始める姿もありました。

いろいろな子ども達の話の中からはなんでおばけが怖いのかなあという話題が持ち上がりました。「それは暗いから」「暗い所は怖いからおばけも怖い」「電気をつけたら明るくなるよ」「でも昔は電気ないで」「あるで お誕生日のローソクみたいなやつつけたら電気になるで」「そうや ちょうちんも赤になってるわ」「そうや 水戸黄門でやってたわ」「そうそう水戸黄門でお侍さんが刀で悪者やっつけてた」「ほんまや赤いちょうちんもったおばけみたいな女の人が泣いてた」と水戸黄門の話で大盛り上がりでした。子どもたちにとって昔のお侍さんは水戸黄門のようで、テレビの中の世界のようにです。でもその中で「映画村行ってきた」と刀の形をした箸箱を持っていた子どもが、「水戸黄門は映画村にいるで」と言い出し、「どこにそのお侍さんがいるの?」「見たい」「見たい」と周りの子ども達も興味津々。「それは京都太秦映画村」と今度はそのお侍さんの話で大盛り上がり。目をキラキラ輝かせお侍さんの話をしているかと思いきや、たちまち忍者の話になりました。「そうそう忍者に変身したことあるで」とある子どもが言い出し、「えっ? じゃあ洞ヶ峠には忍者がいるん?」と何やら話がぐちゃぐちゃに。ぐるっと話が1周したところでおばけがどこに?と思ううちに「洞ヶ峠には何があるの?」という話になり今は峠茶屋という、うどん屋さんになって、「ぼたもち」っていう大きなおはぎが売ってて、すごく美味しいよ。と話をすすめると、「知ってる知ってる」と子ども達の思わぬ反応。「じゃあ、そのうどん屋さんはおばけのお家やったん?」「えっ? 今でもおばけがいるん?」と少し子ども達の表情が曇り始めた。「でもおばけは変身して神様になってるかもしれへんから大丈夫大丈夫」と話が一件落着。かと思いきやおばけが出てきたらどうする?と話になり、♪おばけなんてないさ♪の歌が始まりました。

♪①おばけなんてないさ おばけなんてうそさ むかしのひとがみまちがえたのさ だけどちょっとだけどちょっとぼくだってかわいいな おばけなんてないさ おばけなんてうそさ

♪②ほらがとうげでは おばけだらけだってさ おさむらいさんが いっぱいたんだ だけどちょっとだけどちょっとみたくなあったよ おばけだっているさ やさしいおばけさ

という替え歌が出来上がりました。その替え歌をととても楽しそうに歌っている子ども達。自分達だけが知ってる秘密の歌を少し自慢気に歌ってくれました。

子ども達にとってこの八幡市にある昔の伝説は、少し恐くて楽しくて、ちょっぴり不思議な伝説になり幼児の特性である「空想の世界と現実の世界の両性住人」を物語っているお話でした。

② 八幡市には「流れ橋」正式に上津屋橋といい、久御山町と八幡市を結ぶ木津川下流部に架かる今や貴重となった長大な木造橋があります。全長約356.5m、全幅員3.3mあり、現存する日本最長級です。この橋を見た時の子ども達の驚き、感動は一番にただただ驚きで見つめる子、「長いなあ。誰がつくったん？」と不思議そうに言う子もいました。長い橋を子ども達が一列になり、両手を広げてゆっくり歩いてみました。ミシミシという音に、「うわあ、怖い！」と言いながら「この橋生きてるなあ。痛いよって言っている」という子ども達。「全て木で出来ているんだよ」と言う子と驚いていました。また、堤防や橋で時代劇の映画話になり、お侍さんが「チャンバラ」もやるんやで。ごっついもん着て、カブトかぶって切り合いをやって怖かったという子もでてきて「ホント、僕も見たいなあ私も見たい」とチャンバラの話に盛り上がる子ども達でした。保育園に帰ってから、絵本を読み、木は生きているの。森の木がどこから来て橋になったんやろ。木も生きてるのやなあと一緒に話しました。木も生きているということを知っている子ども達。「八幡の橋は生きているからミシミシ音がするんや。今度お母さんにも教えてあげよ。」と笑顔で話していました。給食も命をいただいていると毎日伝えています。今、生きているこの環境に感謝できる子ども達に育てていきたいと思えます。また「数・量・計」を日々、園庭の作物を収穫する時や、絵本のページたて、横にランダムに読む。マルの数など取り組んでいます。橋の板の枚数も「何枚やろ？」と数を気にする山鳩の子ども達でした。

③ 最近では核家族が増えていて子ども達もお年寄りと触れ合う機会が少なくなってきたように思います。実際、保育現場で子ども達に「おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいる人」と問い掛けると「住んでるよ」と答える子どもは数名で、ほとんどの子どもが「住んでない」「遠い所にいるよ」と答えていました。山鳩保育園では、毎年敬老の日が近付くと「敬老のつどい」という行事が行われています。地域の老人会や同じ法人の中にデイサービスがあり、その利用者の方々が毎年この敬老のつどいに参加され、保育園の子ども達と交流をし親睦を深めています。具体的な内容としては、子ども達からの歌のプレゼント、子ども達が園で習った手遊びをお年寄りの方々と楽しんだり、お年寄りの方々の出し物として子ども達に伝承遊びを教わり、一緒に楽しむ、というものです。普段お年寄りとの関わりが少ない子ども達が敬老のつどいを通してどうすれば積極的に関わられるのか、伝承遊びに興味、関心を持ち取り組む事が出来るのかを課題とし、この敬老のつどいに参加してみました。まず、子ども達からの歌のプレゼントでは、お年寄りの方々にも親しみのある歌を選びました。例えば「夕やけこやけ」や「七つの子」を歌った時はお年寄りの方々も懐かしさを感じられたようで、一緒に口ずさまれる方や涙ぐまれる姿も見られ、子ども達自身も心に響いた様子でした。ただ、初対面だという事もあり、まだ少し双方に距離を感じるように思えました。その後、お年寄りの方、園の子どもでペアをつくり、お互いが知っている「一本橋こちょこちょ」や「ちゃちゃつぼちゃつぼ」等手遊びを

楽しみました。初め、子ども達に人見知りが見られるかと予想したが実際は誰もが積極的にお年寄りの前に向かい手遊びを披露していました。子ども達の中に少々恥ずかしさは見られたがお年寄りの方も温かく迎えてくださり、スキンシップをはかる事で徐々にお互いの距離を縮める事が出来たようです。お年寄りの方は「孫を思い出した」「可愛いね」と言って喜んでくださり、子ども達も「僕のおばあちゃんに似てる」「恥ずかしかったけど楽しかった」と、関わられた事を喜んでいました。その後は、お年寄りの方々から踊りのプレゼントでした。お年寄りの方でも子どもでも楽しめる祭調の踊りだったが、覚えやすく



テンポも良かったので子ども達も一緒に踊ったり、手拍子をする等の姿が見られ、楽しむ事が出来ました。お年寄りの方の反応は「子ども達も一緒に踊ってくれるとは思わなかったので嬉しい」「また機会があれば違う踊りも教えてあげたい」等。子どもの反応は「可愛かった」「一緒に踊れて楽しかった」「もう一回踊りたい」等、お互い楽しめたので良かったです。次に、お年寄りの方のマジックショーでした。大人でも感心するような素晴らしいマジックに子ども達も食い入るように見ている様子で「すごい どうなってるんやろ」「おじいちゃん、スーパーマンみたい」と関心を持っている様子でした。お年寄りの方も満足されていたようで「やって良かった」「こんなに興味を持ってもらえるとは思わなかった」といった声を聞く事が出来ました。その後子どもからお年寄りの方に手作りの小物入れのプレゼントを贈りました。大変喜ばれており、「大切に使うね」「ありがとう」と何度も感謝の気持ちを子ども達に伝えられており、子ども達も照れた様子で笑顔をこぼしていました。「おじいちゃん、おばあちゃん喜んでくれて嬉しい」「何入れてくれるんやろ」と素直な気持ちが聞けました。最後は子ども達がお年寄りの方に伝承遊びを教わり、一緒に楽しむという内容でした。遊びの内容はコマ回し、カルタ遊び、おりがみ、あやとり等です。これらの伝承遊びは日々の保育活動でも度々取り組んではいたものの、実際にお年寄りの方に教わるのではまた違う楽しみや発見があったようで、子ども達も興味津々の様子でお年寄りの方の手本にかじりついていました。特にあやとりでは保育士も知らない作品を次々と披露していただき、子ども達も「どうやってするの」「すごい 僕も覚えて先生に教えてあげる」等の声が聞けました。お年寄りの方も「懐かしい 自分達が幼い頃に楽しんでいた遊びをこういう風に現代の子ども達に伝えられる機会を与えてもらった事に感謝。これを機に、子ども達にも伝承遊びに興味を持ってもらい、後世の子ども達にも是非伝えていってもらえたら光栄です」と満足気な笑みで話しておられました。子ども達も「とても楽しかった」「最初は恥ずかしかったけど、一緒に歌ったり踊ったり遊んだり出来

て良かった」「またおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に遊びたい」と素直な喜びの気持ちが出て良かったです。普段、お年寄りと関わる機会の少ない現代の子ども達にとって、この敬老のつどいは子どもとお年寄りの交流の場となり、地域の伝承を受け継ぐとてもよい機会となりました。今後も保育施設内だけでなく、地域でも子どもとお年寄りが交流を持てるような行事や機会をどんどん設けていきたいです。

④ 地域と保育園の行事を通しておじいさん、おばあさんとの関わりを持っています。毎年、山鳩保育園の夏まつりやクリスマス会では民生委員さんや地域の方々にも協力して頂き、その為の時間やコーナーを設けています。まず一つめは「大型紙芝居（全紙の大きさ）」の読み聞かせをしてくださる時間です。民生委員さんと地域の方々为主体となってやってくださいます。紙芝居のお話は昔話を中心に「浦島太郎」や「さるかに合戦」等、絵は絵の具やクレパスで手描きされたものでとても温かみのある本職のような素敵で大きな絵です。色使いも綺麗ではっきりしているので遊戯室の後ろの方で見ている子どもにも良く見えます。登場人物の声も各々分担されていて、その役になりきった表現、トーンではっきりと時にユーモアを交えて話されるので子ども達からは笑い声が聞かれます。お話の始まりは拍子木を打ち鳴らして始まり、ただただ読んで終わるというものではなく子ども達に読み聞かせの中で問いかけたりする事でよりコミュニケーションが取れています。逆に子ども達からも「何でそうなったん?」とか「〇〇やから〇〇になったんやんな〜」という質問や意見も沢山聞かれます。そういった楽しい読み聞かせをしてくださるのでお話の最後には「もう一回読んで!」と催促する姿も見られ、とても和やかな雰囲気の間でもあります。もう一つは模擬店やゲームコーナーの一つに民生委員さんや地域の方々主催の「ペンシルバルーン」のコーナーを設け「きりん・ねずみ・犬・うさぎ・象」等の動物や「剣・帽子」等といった身につけて遊べる物まで作ってくださいます。子ども達は目の前で風船を少しずつ様々な所をねじって形になっていく過程をとっても夢中になって見えています。一つでは足りないようであれば作って!これも作って!と要求しています。出来上がった時は満面の笑顔で「こんなの作ってもらったよ」と保育士に見せに来てくれたり剣の場合は戦いごっこをお友達同士で楽しむ姿も見られたり、とても人気のあるコーナーの一つでもあります。又、クリスマス会の行事では「サンタクロース」の役を地域のおじいさんがやったださり、サンタクロースの衣装を身につけて子ども達の前に登場します。登場の仕方もどこから登場するんだろうと子ども達がワクワク期待が持てるように毎年違って屋上から登場、玄関から登場、園舎から登場等、考えられておられます。サンタクロースが登場すると子ども達は大喜びで触りにいたり、話しかけにいたり小さいクラスの子もまだ見慣れないこともあって泣き出してしまったりと色々なのですが、サンタクロースのお話を聞いたり、音楽に合わせて一緒に歌ったり踊ったりプレゼントをもらったりと楽しい時間を過ごしています。又、お餅もあんこも手作りの「ぜんざい」

を作ってください模擬店で無料で振舞ってくださいます。子ども達が食べやすいようにとお餅は一口サイズに丸めてくださっています。食べやすい大きさと味なのでしょう。当日は毎年好評ですぐ品切れになります。このように行事の何事においても、子ども達の事を一番に考えてやったださっているのも私達保育士も感謝の気持ちで一杯です。これからもこういった地域との関わりの機会を大切に、触れ合いを通して学んだりする事も沢山あると思うので色々教えてもらって、このような時間を大切にしていきたいと思います。

地域伝承の取り組みを研究していった中で、子ども達の目を輝かせながら、楽しんで地域の事を理解していく姿に保育士自身も地域の事を知り、良いところを沢山見つけ、好きになり楽しんでいくことが大切だと感じました。今の子ども達は核家族が多く、なかなか地域伝承について知る場がありません。家に帰ってもテレビやゲームばかりの生活になっている子ども達がほとんどです。しかし、今回地域に伝わる色々なお話や遊びに触れ、心から楽しさを知ったことにより、本来の遊びの楽しさを知る事ができたと思います。又、子ども達や大人同士の関わり方を学び、色々な発見や学び、つぶやきなどを通して自分で考えられる、工夫する力も少しは身につけることができたのではないかと思います。保育園だからこそ出来る事、保育園でしか出来ない事は集団を生かし、友達との関わりの中で自分の思いを言う、友達の話聞くことによって、楽しんでイメージしながら地域の事を知る事ができ、興味を持てる事だと思います。地域の方との交流を通し、子どもたちに沢山の地域に伝わる色々な事を伝えていき、子ども達と一緒に成長していきたいです。そしてこれからもずっと、この地域にある色々な遊びや伝説など保育園でも伝えていくようにしたいです。歌に踊りが大好きな山鳩保育園の子ども達。次は八幡市に伝わる「八幡おんど」を、地域の方々に教えてもらい一緒に踊り触れ合いを楽しみたいと思います。そして保育園が地域の伝承を通して、より地域との関わりを持てるように、これからも取り組んでいきたいです。

地域との交流ということで、四月には「交通安全パレード」、夏には「地域の夏まつり」、秋には「敬老のつどい」「中学校区のフェスティバル」、三月には「みんなで創る福祉のつどい」と地域からも参加を呼びかけられ、保育園が得意とする音楽「メロディグループ、和太鼓グループ、木琴グループ」の出演で、地域の皆様に大変喜ばれ、恩返しもしています。

## (2) 実践奨励賞

### <課題研究部門>

課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『食事・食育に関する取り組みについて』

足立 由希子 (山鳩保育園・京都府)

課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『豊かな感性を育む「食」を目指して』

佐藤 郁子 (いちご保育園・長崎県)

課題研究④ 遊びと環境について

『遊びと環境について—集団遊びを通して協調性を培う—』

清水 優梨奈 (明星保育園・長野県)

課題研究⑥ 保育園の事故防止について

『保育園の事故防止について』

松本 留美 (山鳩保育園・京都府)

### <自由研究部門>

『いつきへの憧れ—ももの友達関係を育む大きな一歩—』

串原 綾香 (明星保育園・長野県)



### 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて 『食事・食育に関する取り組みについて—生きる力、豊かな心を育む食育—』

京都府・山鳩保育園 足立 由希子

#### 1. はじめに

食べることは生きることの源であり、心と体の発達に密接に関係している。乳幼児期から、発達段階に応じて豊かな食の体験を積み重ねていくことにより、生涯にわたって健康で質の高い生活を送る基本となる「食を営む力」を培うことが重要である。保育園は1日の生活時間の大半を過ごすところであり、保育園における食事の意味は大きい。食事は空腹を満たすだけでなく、人間的な信頼関係の基礎をつくる営みでもある。

山鳩保育園では、0歳から年長まで、様々な食育活動に取り組んでいる。保育士と園児たちはもちろん、月に1度開かれる“山鳩ランド”では地域の方々も一緒に様々な食育活動を通して交流を深めている。また、本園では研修グループとして「食育」「体育」「遊び」「絵本」「造形」「音楽」の6つの領域に保育士だけでなく、3歳児以上の園児たちも属しており、それぞれ研究活動を行っている。食育グループの活動やクラス実践を通して、本園での取り組みを紹介したいと思う。

#### 2. 研究の目的

現代の食生活は大きく変化している。

昔と今、どう食生活が変わったのか？

##### ① 食べやすくなった

柔らかくしたり、食べにくいところを捨て食品を加工して食べやすくする。たとえば昔は玄米を食べていた。これを精米して白米にする。パンも黒パンから、柔らかい白パンへ変わっていった。

##### ② 砂糖と油の摂取

砂糖はアメリカ大陸の発見までは、普通には食べていなかった。大量に生産されるようになってから、世界中の人が調味料として使うようになっていった。油は地中海地方でオリーブ油が使われていたが、日本では明かりに使うものだった。

##### ③ 便利になった

インスタントラーメンなどは、お湯を注げば食べられる、冷凍食品はレンジにかけ

るだけなど手間をかけずに食事は大変便利になった。また、外食をしたり、できあがった惣菜を買ってくるなどもある。保存のための添加物で、見た目は良くても内容の低下した食事となってしまった。

#### ④ 質の変化

科学肥料を使った作物は、有機肥料を使った作物と違って来る。品種改良をしたものは、当然昔のものと違う。昔は塩を塩田で作り、いろいろなミネラル類が含まれていた。ところが今の塩は、純粹に近い塩化ナトリウムである。食品というより科学薬品と言うべきものである。

#### ⑤ 保存方法の変化

昔は乾燥させたり、干したり、漬物にするのが普通だった。今はビンや缶につめたりし、合成保存料や、酸化防止剤をいれるのである。

#### ⑥ 空間の変化

日本人が外国の食を取り入れるようになってきた。和食は日本の気候・風土にあったものを食べていた。日本には四季があり、本来は季節にあったものを食べる。今は一年中あるが、土地でとれたものを食べるのが当たり前のことだった。

上記のように、日本人の食生活は大きく変化してきた。このような時代だからこそ、保育園として何かできることはないか、子どもたちだけでなく、大人にも理解していただくために、食育グループとして活動を始めることとなった。

### 3. 食育グループの概要

以前からグループ活動はしていたが、昨年から「6つのグループ」活動が定着し、保育士、調理員等と3歳以上児が6つのグループのいずれかに所属し、私たち食育グループは毎週火曜日に食育グループとして活動することとなった。園内だけの活動ではおさまらず、各期ごとに同法人4園それぞれの食育グループが集まり、活動内容を発表したり、これからどうしていくべきか話し合ったり、子どもたちにとってよりよい成果があげられるよう、4園で協力しながら研究をすすめている。

### 4. 食育の取り組み内容

#### 【土づくり】

〈ねらい〉栽培の基礎づくりを知る。土の感触を味わう。

〈方法〉土づくりの材料を3種類（苦土石灰、化成肥料、堆肥）準備。素手でかき混ぜながら、土の感触を味わう。土ができあがると、鉢やプランターに土を入れる。

〈結果・考察〉栽培するための土には3種類もの材料が必要であることを子どもたちに伝えると、とても驚いていた。土を混ぜていると、幼虫やダンゴ虫などたくさんの虫が出て

きて、違うおもしろさも味わえた。土を素手で混ぜることによって、その感触や気持ちよさも味わうことができた。

### 【種まき】

〈ねらい〉自分でまいた種を育て、収穫するまでの成長や変化を楽しむ。

〈方法〉食育グループは全員で18名だが、それぞれ「かぼちゃ」「枝豆」「とうもろこし」などたくさんの種類から一つ選び、一人一つ鉢に種をまいた。

〈結果・考察〉芽が出てくると大喜びで、朝や夕方など、水やりも各自が責任をもって行うことができた。実ができてくると、保育士に伝えるだけでなく、友達同士でもその発見を楽しむ姿が見られた。うまく育たず枯れてしまうのは残念だったが、植物界での生死を感じる事ができ、よかったのではないかと思う。

### 【収穫】

〈ねらい〉採れたての新鮮な素材の味を楽しむ。収穫する喜びを知る。

〈方法〉はじめに収穫の仕方を説明し、自分たちの手で収穫する。収穫したものをその場でまるかじりする。

〈結果・考察〉大切に育てた結果、全てではないが収穫できるまで育つことができた。自分たちで育てたものだけでなく、園庭で立派に育ったきゅうりやトマト、なすびなどの収穫も行い、その場ですぐにまるかじりした。給食の野菜は苦手な子どもでも、採れたての野菜はとてもみずみずしく、「おいしい」と言って笑顔で食べていた。味も何もつけていないが、子どもたちはみんな「おいしい」と言っていた。素材そのもののおいしさを感じさせてあげることができ、とてもよかったと思う。

### 【園内探検】

〈ねらい〉子どもたちが自ら園内の栽培物に興味をもち、発見していくおもしろさを知る。

〈方法〉園内にはところ狭しと、多くの野菜や果物が育っている。園内にはどこにどんなものが植えられているのか、自分たちの足で探検してみる。

〈結果・考察〉子どもの驚きや発見、つぶやきもたくさん聞くことができた。また、野菜の葉っぱを触ったり、大きさ比べをしたり、匂いをかいでみたり、様々な楽しみ方ができた。季節ごとに探検を行い、園内マップを作成し、四季によって園内の栽培物がどのように変わっていくのかをまとめていきたいと考えている。

### 【ぬか漬け】

〈ねらい〉無駄をなくす。素材の味の変化を楽しむ。

〈方法〉本来なら捨てる部分でもぬか漬けにして食べる。(例えばスイカの皮の部分など)園庭でできたいろいろな収穫物をぬかどこに漬ける。

〈結果・考察〉本来なら捨てる部分も、ぬか漬けにすることで無駄なく食すことができた。素材そのものの味とぬか漬けにした後の味の変化を知ることができた。ぬか漬けの定番のきゅうりやなすだけでなく、ぶどうやキウイにも挑戦してみたが、意外にもおいしかった

ことに保育士も驚いた。

### 【フィッシュパーティー】

〈ねらい〉スーパーなどで売れている魚の切り身しか見ることのできない現代、まるごとの魚がどのようなものかを知る。また、親子で身をほぐしながら食べる楽しさ、魚そのものの味を楽しむ。

〈方法〉保護者の方々にも協力してもらい、園庭で魚を網焼きにする。焼きあがった魚を親子で身をほぐしながら食べる。

〈結果・考察〉普段なかなか経験できない魚のまる焼きを体験することができてよかった。親が子どもに骨を取り除いたり、とりわけてあげたりなど、親子の絆をより深められたのではないかと思う。保護者の方も、「家では切り身しか使っていないので、よい体験ができた」と喜んでおられた。

### 【きょうだいグループ】

〈ねらい〉思いやりの心を育てる。家庭的な雰囲気の中で人間関係を育てる。

〈方法〉3・4・5歳の縦割りできょうだいグループを作り、ランチルームで一緒に食べる。給食前になると、年長児が同じグループの3・4歳児を部屋まで迎えに行く。それぞれテーブルごとに花が飾られ、名曲が流れ、明るい雰囲気づくりに努めている。

〈結果・考察〉異年齢で食べることにより、3歳児の分は5歳児が4歳児は自分で給食を取り分けてあげたり、おかわりの量を加減してあげたりなど、思いやりの心が芽生えている。年少児が「迎えに来るのが遅い」と言うと、次の日は「昨日遅いって言われたから早く迎えに行かなきゃ」と年長児が早めに迎えに行ったりなど、互いに人間関係が深まってきているように思う。また、3・4歳児は年長児の食事マナーを見て学んだり、苦手なものでも頑張って食べようとする姿が見られる。一緒に食事をしながらふれ合う中で、励まされたり、時には食べさせてもらいながら、食に対する意欲が現れてきたことは大きな成果だと思う。

### 【山鳩ランド】

〈ねらい〉地域の方々との交流を図る。親子クッキングを通して、親子の絆をより深めてもらう。保育園の特色を知ってもらう。

〈方法〉山鳩ランドでは、地域の方々と保育園で親子クッキングを行う。今までのクッキング内容は、ジュース作り、ホットケーキ、フルーツポンチ、竹パン、お好み焼き、たこ焼きなどである。それぞれ、保育園で栽培されている野菜や果物も使用している。

〈結果・考察〉家庭での栽培があまりされていない今、保育園ならではの取り組みとして、栽培されている野菜や果物をその場で採って調理することにより、より新鮮さを感じることが出来る。また、家ではなかなか親子でクッキングしようとしないう家庭が多く、保育園でこのような場が設けられているのは嬉しいとの声もあがっている。加工品や添加物が入っている食べ物が多い中、保育園ではできるだけ素材そのものの味を生かした体にやさしい料理作りを目指している。

### 【ハロウィンパーティー】

〈ねらい〉 まるごとのカボチャのデコレーションを楽しむ。衣装作りもして、ハロウィンという行事を楽しむ。

〈方法〉 柔らかく蒸したまるごとのカボチャを各クラスでくりぬいてデコレーションする。衣装作りをして、“シンデレラのスープ”の曲に合わせて踊りをして楽しむ。くりぬいたカボチャはスープにして給食時にいただく。

〈結果・考察〉 各クラスで特徴あるカボチャのデコレーションができてよかった。衣装作りも楽しみながらでき、ハロウィンという行事を体験することができた。くりぬいた部分も無駄にせず、おいしくいただくことができ、よかった。

### 【梅美台保育園での園芸活動】

〈ねらい〉 高校生とふれ合い、楽しみながら園芸の仕方を学ぶ。

〈方法〉 数名ずつのグループになり、それぞれ高校生と一緒に種まきの仕方、水のやり方を教えてもらう。

〈結果・考察〉 普段ほとんど関わることのできない高校生たちとふれ合うことができ、貴重な体験となった。子どもたちも真剣な表情で高校生の話を聞いていた。自分たちの植えた種に親しみの気持ちも生まれてきたようである。少しの間だったが、名前を覚えあったり、各グループでの人間関係を築こうとしていた姿も見られてよかった。

## 5. クラスでの食育活動

### 【給食やおやつの下処理】

〈ねらい〉 自分たちで給食やおやつの下処理をすることで、苦手なものでも頑張って食べようとする気持ちを育てていく。五感の機能を助長する。食に対する関心を高める。

〈方法〉 0歳から5歳児まで、それぞれの年齢でできる範囲で給食やおやつの下処理の手伝いをさせていただく。

〈結果・考察〉 各クラスが積極的に毎月様々な下処理を行うことができた。野菜嫌いの子どもでも、自分たちで下処理を行った給食は頑張って食べることができた。また、食材の名前にも興味を持ち始め、子どもたちの方から「これなに？」と問いかける姿も増えた。毎月行うことで、確実に子どもたちの食への関心は高まってきたと思う。

### 【体育ローテーション】

〈ねらい〉 午前中に様々な体育あそびをローテーションで行うことによって、体の様々な機能を助長するとともに、おなかのすくりズムを整え、食欲の増進を図る。

〈方法〉 体の様々な部分を鍛えるための体育あそびをいくつか用意し、ローテーションで繰り返し行う。

〈結果・考察〉 子どもたちも楽しみながら腕や、足腰の強化につなげることができてよかった。午前中にしっかり体を動かすことにより、食べる意欲がより出てきたと思う。

## 【紙芝居作成】

〈ねらい〉栽培物を写生したものを各季節ごとにまとめることにより、季節感を味わう。季節ごとの旬の食べ物を知る。また、写生することの楽しさを知る。

〈方法〉園庭に栽培されているものを各クラスで写生し、季節ごとにまとめて紙芝居にする。

〈結果・考察〉まだ紙芝居として完成できてはいないが、各クラスで写生していくうちに、子どもたちの観察力もついてきて、大人が気づかないような細部まで描き表すようになってきた。はじめは描けない子どもも、回を重ねるうちに、ダイナミックに描けるようになってきた。

## 6. まとめ

昨年度から食育グループとして様々な活動をすすめるにつれて、子どもたちの「食」への関心は確実に高まってきているように感じる。これまで行ってきた給食の下処理も、はじめは保育士からの発信だったが、回数を重ねるうちに、子どもたちから「次はこんなことしたい」と提案する姿も見られるようになってきた。また、食材のサンプル展示を毎日見ることにより、食材の名前も覚えるようになった。

食べ物の大切さを知り、食事のマナー、ルール、規則正しい食生活を送る力など適切な「食」に係る「技」を身につけ、健全な身「体」、さらに豊かな「心」を培い、豊かな人間性を育てていく“心・技・体を培う食育”を進めていきたい。

## 7. 反省・課題

食育を推進するためには、家庭、学校、保育園、地域その他あらゆる場所において、食について考える機会を確保し、食を育む環境を整備することが必要である。また、自然の恵みや生産者等への「感謝」の気持ちを育むことや、「命」を大切にする気持ちを養うことが重要である。

園としては様々な方向から食育活動に取り組むことができて良かったが、保護者への発信が不十分だったことがあげられる。また、調理員とのふれ合いの場が少なかった。

来年度は、保護者への発信のために、園だよりとは別に「食育だより」として、食育に関する様々な知識や取り組みなどを掲載し、より食育の重要性を理解していただけるようにしていきたい。また、これまでの経過を振り返り、より活動を深める環境づくりを目指しながら、家庭の食事へと繋がる方向を考えていきたいと思う。

子どもたちに今伝えなければならないことは何か、インスタント食品、ファーストフードなどの濃い味付けのものに慣れ、素材の味を味わうことを大人も忘れかけている現代である。これからも、子どもたち本来の優れた感性に本物の味を届け、食べることへの感謝の気持ちが持てるよう、現状に満足せず、更に食育活動をすすめ、研究内容を深めていきたいと思う。

## 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて 『豊かな感性を育む「食」を目指して』

長崎県・いちご保育園 佐藤 郁子

### 1. はじめに

いちご保育園は、諫早市中心部の南西に位置し、周囲に県立総合運動公園 諫早公園、眼鏡橋等、緑豊かな環境に恵まれた地にあります。園から徒歩15分には通称『いちご村』と称する、園児が野外活動を行う山林（畑地）を有しています。ここからは、季節の野菜や果物・野草が豊富に収穫でき、野鳥・昆虫等自然の生き物に触れる機会も多いことから、活動時には子ども達の表情も豊かで明るく、生き生きとした元気な声が響いています。

給食の方法は、セミバイキング方式としています。「多く・普通・少なく」自分の意思で選択し、お当番がつぎ分け、ランチルームに持ち帰って食べます。園児数は145名（平成21年10月1日現在・3歳未満児65名・3歳以上児80名）、栄養士3名で離乳食・アレルギー除去食・普通食の完全給食を実施しています。

### 2. 食育目標

- ・食を通じて生命の尊さを知らせ、食物で健全な心と身体を育てる。
- ・『3食きちんと食べる子、偏食のない子、食事のマナーを守れる子』づくりをめざす。
- ・「いちご村」や園庭菜園での野菜づくりを通じ、収穫と調理、食する楽しみを体験する。

### 3. 実践報告

「いちご村」では、季節季節に食することの出来る野草がたくさん収穫出来ます。各クラス園児は保育時間に、お散歩しながら又遊びの傍らいろいろな野草の収穫も行います。

4月には、ヨモギ採りをして帰ってきました。子どもたちの「先生！天ぷらにして！」との要望に、翌日天ぷらにして出すと「僕たちが採ったヨモギは、なんかいいかおりがするね！」と友達との会話が弾んでいました。残ったヨモギで、「何を作ろうかな？」と厨房で話し合い、ヨモギクラッカーを作ってみました。子ども達の反応は「なんかおいしいよ」と意外と好評でした。お店に並んでいるお菓子のような甘さがなくとも、自分で収穫した食べ物だから、なんとなく美味しさを感じたのかもしれませんが。同じ時期に収穫してきたワラビを、味噌汁や煮物に使ってみました。給食の時に「ぞう組のお友達が採ってきたワラビよ」と話をすると、子どもたちは残さず食べていました。

5月になると、「いちご村」の竹林には、たくさんの竹の子が生えてきます。各クラスで、日々大きくなる竹の子を採ってきて、子どもたちが皮むきをします。厨房であく抜き

をして、保護者に持って帰っていただいています。次の日に子どもたちは、「竹のご飯してもらったよ」「お母さんが料理したよ」など厨房に話をしにきてくれます。

6月は、じゃが芋掘り・淡竹取り・田植え・トウモロコシの皮むき・ハンバーガー作りと子どもたちが食に関わる行事が盛り沢山です。じゃが芋は、思いの外大量の収穫でしたので、給食にも多くの量を使用しました。おやつの際に素材の味が生かせるよう塩茹でにすると、「僕たちが掘ったのは、おいしいね。」といつもより少し楽しみの増した「おやつ」となったようでした。フライドポテトにしたり、地元愛野の名物『じゃがチャン』を作ったりと、いろいろな工夫をし、私達も思わぬ創作の楽しみを味わうこととなりました。

田植えでは、地域の御老人達に教えていただきながら、子どもたちは苗を植え、ぬかるみを楽しみ、はしゃいでいました。

また、大好きなハンバーガー作りでは、子どもたちの目の輝きが違ってきます。材料をテーブルに並べ、自分達で自由にパンにはさんで食べます。レタスを小さくちぎりマヨネーズで味付けしたもの、トマトをはさんだもの、肉をはさんでケチャップで色付けしたものの、十人十色のハンバーガーができあがります。それを食べる子どもたちの嬉しそうな顔、給食担当者としての喜びを感じる一瞬です。

7月は、毎年『夏祭り』と『お泊まり保育』があります。お泊まり保育では、おやつにホットケーキを作りました。ここでも子どもたちが腕をふるい、ホットプレートで美味しく焼き上げた生地、ホイップを絞り出し思い思いの形に仕上げます。最後にサクランボをトッピングし完成です。夕飯には、カレーとサラダ作りで、なれない包丁を使い、保育士に手伝ってもらいながら、キュウリや人参を切ります。自分達で作ったカレーを食べながら、「これは、僕が切った人参」「これは、あたしがちぎったレタス」と話しが弾みます。お代わりもいつもの2倍です。残さず食べ、「ごちそうさま、ああうまかった！」と、満腹の笑みが弾けます。

翌日のお昼は、いちご村の竹林で切ってきた大きい竹を割って、園庭での『冷やしそうめん』です。ランチルームで食べるより美味しかったようで、いつもは少食の子もおかわりをします。食事環境の変化が及ぼす食欲増進効果は疑いないようです。

今年、いちご村で枝豆を育てました。子どもたちに採ってもらい、湯がいてみると時期が遅かったようで、茶色になっていました。子どもたちは落ち込んでいましたが、時期が過ぎると食べられなくなる事を覚えたようです。また一つ成長しました。

8月になると、たくさんの夏野菜が収穫できます。オクラ・トマト・南瓜・茄子・ピーマン・キュウリなど、子どもたちが採って、厨房に「おいしい給食作って！」と、持てきます。

9月は、お月見団子作りです。3歳以上児が小さい手で、きな粉を団子にまぶします。ほどなく団子の山の出来上がりです。団子・ススキと果物・野菜を飾り、月の絵を貼って十五夜を祝います。

毎年10月には、立派に育ったさつまいも芋の収穫を祝い、保護者と一緒に「芋掘り大会」を催します。厨房では「いちご村」で収穫したさつまいも芋・大根・しいたけを使い大量の豚汁や、芋づるの佃煮を作ります。「いちご村」への出前で又ひと騒ぎです。子どもたちの野外での食欲は旺盛で、あちこちから“おかわり”の声が飛んできます。そのうち、保護者と子どもたちが畑に穴を掘り、煙に涙し頑張っていたさつまいも芋が焼けてきます。ホイルで包みホクホクとした『焼き芋』に又、子どもたちの食欲が湧いてきます。焼き芋を食べる子どもたちの表情は、何とも言えない楽しそうなものでした。

運動会も終わり、落ち着いてきたこの時期に、テーブルマナーを始めています。毎月1回ナイフとフォークを使っての給食に取り組みます。10月から始めて翌年の3月には、市内のホテルでオシャレなお洋服を着てのお食事会です。当日は、子どもたちも緊張して背筋をピンと伸ばし、いつものおしゃべりもありません。立派なマナーを身につけた小さなレディーにジェントルマンです。

11月には、6月に植えた米の稲刈りです。子どもたちは、毎日食べるお米がどのようにしてできているのかを初めて知ります。ランチルームで玄米を精米機にかけると、遊んでいた子どもたちが寄ってきます。「これ、明日食べるお米？」と話しかけてきて、いつものまにか精米機の回りには、興味津々の子ども達の顔が集まります。炊きあがった新米は何もつけずに、好きなように丸く丸めてオニギリにして食べます。お母さんのマネをして上手に三角ににぎることができる子どももいます。新米そのものの味を楽しんでいるようでした。

またこの時期、園庭の渋柿が熟れてきます。枝も折れる程の実りです。干し柿にし軒先に吊るしていると、「いつ食べれるの？」と、園児の興味が集まります。

12月は毎年大根をたくさん収穫してきます。園児と一緒に大根の漬け物を作ります。重しをした大根から水分が出ているのを見て、不思議な顔をしています。

去年は、園の『十周年記念の餅つき大会』がありました。保護者や地域の方々・同法人の老人施設から手伝いにたくさん来ていただき、臼5台で90kgのもち米をつきあげました。きな粉餅・あん餅にゆとり餅、丸めた数は1000個超、1日たっぷり楽しめる大会でした。また、この日年長組は園で作った干し柿に、園児が作った大根漬けと、つきたての餅を、町内の独居老人にお届けし、大変喜ばれました。

クリスマスの日、園庭のシンボルツリーのもみの木が電飾され、光のツリーに変身します。園児は、ケーキに飾り付けをし、いつも行事の際に駐車場をお借りしている近所の農協や、お世話になっている病院などにお届けします。先方では、毎年楽しみにしているとのことで、感謝の声もいただいています。

1月は、料理人の方をお呼びし、最近家庭で見られない魚の解体を見学します。日頃スーパーで切り身の魚しか目にしない子どもたちは、魚が料理されるのを真剣な表情で見えています。鯛の中から小さなイカが出てきたこともありました。本物を目にする数少ない時

間です。

今年、平成17年に「いちご村」で卒園児が植えたビワの木が、たくさんの実をつけました。そこで『2分の1成人式』と称し、10歳（現在小学校4年生）になった卒園児に呼びかけ、びわ取りをしました。遠くは五島からも駆けつけ、ほとんどの園児が集まりました。空き缶で作るサバイバル飯を炊き、カレーを食べ、「いちご村」で採れた野いちごをデザートに味わいました。卒園児も保護者も保育園時の昔に戻る、楽しいひと時でした。最後は「いちご村」にタイムカプセルを埋め、「また10年後の成人式に集まろう！」との約束がなされました。10年後、どんな成人となっているのか、成長が楽しみです。

最近、食物アレルギーの子どもが増えています。当園でも卵・竹の子・そばのアレルギーの園児が7名います。この園児に対しては毎年4月に、保護者に病院からの食事指導指示書・除去の程度・アレルゲン検査表を提出してもらい、園長・主任保育士・担任・栄養士で面接を行っています。

アレルギー源の制限の程度を確かめながら、確実にその子どもに合ったアレルギー食が出来るように話し合います。又、アレルギーのある子どもが、不意にアレルギーの原因物質を口にしたり、隣のお友達の食事を取って食べないように、アレルギー食の子どもは、席を別にして、必ず保育士が専属について食べさせています。お皿や茶碗には、名札をつけ、ラップをし、ラップにも名前を書き、間違えのないよう気を配っています。

食の細い子ども、食事をする事、その行為そのものがスムーズに行えない子どもへの対応についても配慮を要する一つです。これらの子どもに対しては、保護者と面談を行い、食材をその子が食べ易い大きさに切る、又機能的面から食事の姿勢を一定に保つ必要がある子については、保育士が専属で当る等の支援を行っています。

食への意欲が乏しくなっている子どもは、その意欲を取り戻してやらなければ、食べようとしません。家庭で子どもの心を痛める出来事があると、兄弟とも食べなくなります。家庭環境の変化は、敏感に子どもの食欲に影響を及ぼすのです。このような時には、食事の量での無理はしないようにしています。その子に合わせた給食の量、セミバイキング等で給食に変化を持たせ、自分のお腹の空き具合、食べるスピードなど自由にまかせ、その子の食欲の回復を待つようにしています。

#### 4. 終りに

「園児の給食」、この一見定型的と思える行為、原始的には「空腹を満たす」ごく単純な行為ですが、子どもを取り巻く環境が複雑の度を増す現代にあっては、「食への欲求」に心の側面が、より比重を増しているのではないのでしょうか？この面での子どもへの支援がより求められて来ているのではないのでしょうか？

本来、「食」は楽しいものであるはずですが。園児のその楽しみの欲求を阻害する要因があれば、「食」を担当する者として、手法は別としても、その原因の除去にまで目を配る

べきではないのか？最近とみに胸に残る思いの一つとなっています。

当園の園児は、一日のエネルギー量の約半分を、保育園の給食とおやつで摂取している実情にあります。このことから、毎日の給食は園児の成長に極めて重要な役割を果たしているのです。「食」を通じ、「食」の関心から心の成長・人や物への思いやりへと成長する、当園が「食」を通じての目標とする方向を目指し、これからも、自然に触れ、地域の方々や同じ法人施設のご老人と関りながら、子どもの心の育成を図る、このことにさらに努力していきたい、その想いをより強くしております。



## いちご保育園・食育報告

4月

ヨモギ採り

子ども達が採ってきたヨモギです。  
「なんか、美味しいよ！」と言って食べていました。



みじん切りにしてヨモギクラッカー  
を作りました。「なんか、いい香り」  
と言っていました。



6月1日

ハンバーガー作り

「楽しいなあ〜！」と言いながら、  
作っていました。  
美味しそうです！！



6月

じゃが芋堀り

たくさんのお芋が採れました。  
形も大きさもいろいろです。



6月16日

茹でじゃが芋

いちご村で採れたじゃが芋を、湯が  
いて、おやつにだしました。  
翌日、いちご村で採れたじゃが芋を  
フライドポテトにしました。



6月19日

ジャガちゃん

愛野のジャガちゃんを作りました。  
みんな、「美味しいね」と言って食べていました。



6月5日

とうもろこしの皮むき

おやつで使うとうもろこし  
1箱分を年長組が、むいてくれました。



とうもろこしを、おやつに出しました。  
上手にかぶりつけない子どもは、  
指で一粒ずつ取って美味しそうに食べていました。



田植え

地域のご老人に教えてもらいながら  
植えました。



6月15日

おにぎり作り

年長組が、自分でおにぎりを作って  
食べました。今月は「しそ入りおに  
ぎり」でした。

子ども達は、「来月は、何のおに  
ぎりにしようかな?」と話をしていま  
した。



お泊り保育

カレー・サラダ作り

包丁の使い方も上手です。

きゅうり・人参・玉葱・じゃが芋を切りました。



「カレーもサラダも、自分達で作ったのは、美味しい!」と、言いながら食べていました。

たくさんおかわりをしていました。



ホットケーキ作り

生クリームとサクランボもトッピングしました。



枝豆

園庭で育った枝豆といちご村で採れた物です。

残念ですが、時期が過ぎて食べられませんでした。



7月

園庭と、いちご村で採れました。

きゅうり・茄子・トマトが出来ました。



8月

トマトが採れました。

とっても美味しそうな可愛いトマトです。

翌日の給食に入れました。



クレープ作り  
バナナとピーチを置いて好きな物を  
包みました。  
ピーチが人気でした。



アイスクリーム  
チョコとバニラを置いていたらチョコ  
が人気でした。



十五夜  
団子とススキ・果物と野菜を飾りま  
した。



団子をこねました。丸い小さい団子  
がたくさん出来ました。



10月  
テーブルマナー  
お部屋に入る時も緊張した様子でし  
た。上手にナイフと  
フォークを使っていました。



11月  
お米の精米  
玄米から白いお米になるまでを、見  
ています。  
「明日の給食のご飯になるんだよ  
ね!」と、皆でお話しています。



### 大根の収穫

大根がたくさん採れました。  
塩漬けにして『大根の酢漬け』を作りました。



### 12月

#### クリスマスツリー

去年は、いちご保育園の10周年でした。



#### クリスマスケーキ作り

美味しそうなケーキが、出来ました。



### 1月

しいたけ・白菜・キャベツ  
ブロッコリーがたくさん採れました。  
子ども達が採った物です。



### 3月

ホテルでのテーブルマナーです。みんなオシャレして緊張しています。



給食室からの卒園のお祝い  
大きなケーキを、朝から作り  
おやつの時、年長組に出します。  
「わあ〜！」と、大喜びです。



卒園おめでとう  
保育園で、たくさんの野菜や果物を  
育てて、収穫した物を食べて大き  
くなりました。もうすぐ、1年生です。



2分の1成人式  
卒園時に植えたビワにたくさんの実  
がなりました。

10歳になった卒園児が集まりました。





## 課題研究④ 遊びと環境について

### 遊びと環境について～集団遊びを通して協調性を培う～

長野県・明星保育園 保育士 清水 優梨奈

#### はじめに

とても豊かな発想力も持ち、遊びを展開していく反面、思いを言葉で伝えられない事から、一人遊びを好み、友達との関わりを避けている本児の姿をみて、『子ども自らが周囲の人と関わっていく事ができる環境』の必要性を改めて感じた。

集団生活の中で、言葉による伝達や対話、仲間との話し合いを繰り返しながら自分の思いや考えを伝える力・相手の話を聞く力を身につける中で、仲間が必要であることを実感し、仲間の中の一人としての自覚が生まれ自分への自信と友達への親しみや信頼感を高めていって欲しいと思う。

『本当は鬼ごっこことが好きなのかも。逃げたりできるし。でも誰か一緒にやってくれるかな』と、つぶやく本児の本当の心の言葉を聞き、以上の願いを含め保育士として、本児が遊びを通して、人とのやり取りを楽しみながら、子ども相互の関わりや周囲の大人との関わりが促されるような環境を構成していきたいと思い、記録をとってきた事例研究を紹介したいと思う。

#### 1. 主たる問題

- ・登園時間が比較的遅く、すでに友達が大勢登園して来ている日を好まず、気分が優れない日は母から離れて保育室に入る事が出来ない。
- ・比較的、登園人数の少ない土曜日はスムーズに母から離れられる時もあるが登園時間が遅い為、気分も優れず、遊びだすのに時間がかかる。
- ・集団遊び、設定保育を好まず、一人で遊ぶ事を好み、虚構の世界に入り込んでしまう。(設定保育の中でも、自由に考えて行動する時間があると、次第に気分が良くなり遊びに入り込む。)
- ・母が夜仕事をしている為、祖母宅に預けられる事もあり、母との関わりが希薄になりがちで不安定な時が大半を占める。
- ・母は、園の活動・行事、日々の保育士とのやりとりや、普段の家庭での様子から本児の姿を理解はしているものの、自分のプライベートや仕事が優先してしまい、子どもを十分受け止められない部分がある。

## 2. 事例の概要

●氏名 宮沢 翔 [みやざわ しょう] (仮名)

### ●クラスの特徴

- ・ 5歳児。クラスの三分の二を女児が占め男児が少なく、遊びを見ても、ごっこ遊びが多く、幼く感じられる。その反面、女児が活発でクラスをリードしている。
- ・ 目標に向かい、友達と協力し合ったり、励ましあい、向上しようとする気持ちがうかがわれる。又、何よりクラス全体に団結力がついてきた。その反面、まだ言葉で気持ちを伝え、表現する力は乏しい。

### ●現在のクラスでの様子

- ・ 友達との関わりが増え、同じ空間で遊んでいるが、空間にいるだけで一人遊びを楽しんでいる。本児も一人遊びを満足しているが、自分の遊びの世界に入ってくる友達に対し何も言えず、遊びを中断してしまう。人が入る事により遊びを継続出来ない。
- ・ 自分の好まない事（主にリズム遊び・音楽等）に対しては、全く意欲を示さず、その空間にはいるが立ち尽くす。
- ・ 8月、クラスで取り組んでいる跳び箱9段をクラスの中で初めて跳べ、みんなから認めてもらい自信が付く。その次の日から『今日跳び箱する?』と、今までにない期待感を持ち登園するようになる。

### ●入園時の様子

- ・ 入所日：平成17年3月1日
- ・ 登園後、泣く事もなく母からすぐ離れ、遊びを始める。  
母に対して後追いをする事もない。
- ・ 人見知りをしない。母は、手のかからない子だと思っていた。

### ●入園後の経過

- ・ 0歳児…慣れない環境にも戸惑う事なく母親ともすぐ離れ遊びだす。
- ・ 1歳児…活動中、注意散漫になり集中出来ない。気分にもらがあり生活も左右される。
- ・ 2歳児…友達と遊びたい気持ちはあるが、キッカケがつかめない。  
遊びが満足されないと次への活動へ気持ちを切り替えられない。  
朝、母と離れる事が出来ない。降園時は帰りたがらない。
- ・ 3歳児…3歳児後半、母と離れる際、大泣きし追いかけていく。  
活動に対しても意欲が見られないが、興味がある遊びは、一人でどんどん展開していける。
- ・ 4歳児…母と過ごす時間が少ない時は、特に母と離れられず大泣きし追いかけていく。  
遊びは、虚構の世界に一人で入り込む。  
『友達が多いから保育園、嫌。』と口にする。登園人数が少ない土曜日は、

気分良く登園できる事が多い。

- いつごろから『問題』が顕著となるのか
  - ・3歳児…母との関わり。一人遊びを見て。

### 3. 事例理解の背景となる情報

- 生育歴
  - ・平成15年7月5日生まれ
  - ・入所日：平成17年3月1日
  - ・2歳児の時に両親離婚。年に一度、父と再会。
- 家族構成
  - ・母(31) 弟(4)

### 4. 経過（※枠内は独白、及び保育士の主観）

- ・年長児。一人遊びを好む翔であるが、2009年4月27日『本当は鬼ごっこことかが好きなのかも。逃げたりできるし。でも誰か一緒にやってくれるかなあ』と、周りに聞こえるよう、つぶやきながら、滑り台の周りをウロウロする翔。

今なんて言った!?翔が鬼ごっこやりたいって言った!しかも、誰か一緒になって!どうするのかな翔。少し様子を見てみようかな。

私は、翔がどんな行動をとるか、しばらく様子を見ていたが、結局誰も誘わず、翔は不満そうな表情をしながら、いつものケーキ作りを始めた。

あー…。誰も誘えなかったか…。でも翔が、誰かと一緒に何かをしたい!という気持ちを言葉にしてくれた事が嬉しい!その思いを友達に伝えられたらいいのにな。  
でもこれは翔が友達と関わっていく為の、いいチャンスだぞ!なにか良いキッカケを作れたらいいんだけど。翔の少しの心の変化を大切に、友達と関わって遊べる環境作りをしよう!

4月30日考えた末、私はクラス全体に、『しっぽとり』を提案してみた。新聞紙をしっぽにし、ゲームをした。ゲーム開始後、嬉しそうに逃げ回る翔だったが、すぐにしっぽを取られてしまう。遊戯室の隅に座り、つまらなそうに他の友達を見ていた。

そんなあ…。こんなに、あっけなく終わってしまうなんて…。でも、しっぽを取られてしまえば、逃げれないから、そりゃつまらんよな!しかも、新聞紙はボロボロになってもったいなかったなあ。

シッポを何で作れば良いか子ども達と話し合った。全員で考えたが、なかなか意見がまとまらなくグループ毎に話し合う事にした。大勢での話し合いを好まない翔は、積極的に

話し合いに参加はしていないのだが、意見を出す友達に一人ツッコミをしたり、全く参加していない様子ではない。しかも、その一人ツッコミは結構鋭い、いい意見なのだ。その翔の一人ツッコミを聞き逃さず代弁してくれた子がいた。その一言で翔も顔がにこやかになり、話し合いの雰囲気の中も居心地が良くなったようだった。グループで話し合った結果、なわとび・靴下・ヒモ・ズボン等の意見が出た。その中でまた話し合い、長さも調整でき、何度でも使えるヒモに決定した。シッポをヒモにしてから何度も楽しめたが、私の中で〔すぐシッポをとられてしまったの、つまらなそうな表情〕が、ひっかかっていた。

5月18日 『すぐにシッポをとられちゃった友達は、つまらんよなあ…どうしたらいいと思う?』と、子ども達に問い掛けてみた。すぐに返答が! 『次、頑張ればいいじゃん!』 『頑張って逃げればいいじゃん!』 その通りなのだが…。

その日、どうにか永遠に楽しめるシッポとりは出来ないかと、家に帰ってからゲーム遊びの参考書を開いた。目に飛び込んできた文章 [ルールを追加する事により子ども達が積極的に関わる遊びとなるものもあります。しっぽを取られてなくなった子は、先生の所に来たら新しいシッポをつけてあげます。またゲームに参加できます] これは、おもしろいかも!! さっそく新しいシッポを作り、明日子ども達がどんな反応をするか楽しみにした。

5月19日 新しいシッポを子ども達に見せ『じゃーん! 先生は今からシッポ屋さんになります♪シッポをとられてしまっても、新しいシッポを付けたらまた、ゲームに参加できます!!』 子ども達は『すっげー! イエーイ!』と、大歓声! 翔も目をキラキラさせ私を見てくれた。何回でも復活できるシッポとりは、とても盛り上がった! その日の延長保育の時間、『先生、シッポ貸して〜』と子ども達がやってきた。何やらコソコソと友達同士話し合っていると思っていたら、腰に大量のシッポを付けている翔を発見!! 何をしているか尋ねると翔は『みんなでシッポとりで、翔君がシッポ屋さんな』と言いニコニコ逃げ回っていた。

さすがアイディアマン! 腰に付けて逃げ回れば、より一層楽しみが増し、シッポ屋さんやる人も楽しめるもんな! 本当に遊びを展開していくのが上手いな! それに、友達と話し合っ、あんなに楽しそうに走って逃げて遊んでいるなんて嬉しい! 翔の一言から、新しい遊びが生まれ、クラスで話し合う時間も作れ、私自身も勉強ができ、とても良い機会だった。

7月29日 久しぶりに朝から大泣きで登園した翔。理由は『ママが今日からお友達少ないって言ったのにたくさん来てる』だった。今日から自由登園が始まったので母親も、友達の登園が少ない日を好む翔へ『友達が少ない』と伝えていた。だが、年長クラスは三名の欠席のみで人数がほとんど変わらないため、翔は現実を受け止められなかった。その気持ちを、しっかり受け止めてから遊びへ誘い、園庭でジュース屋さんごっこをした。みんなで協力して机を運んだり、絵の具と水を混ぜてジュース作りをした。遊びだすと一番張り切る翔。友達の色水を分けてもらい、新しい色を作り出している姿を見てチャンスだ!

と思い、『ねえ翔君、お友達に、赤色わけてって、自分から言って、自分の色と混ぜて新しい色作って、すごいよお!』と全員に伝えた。

翔は照れていたが嬉しそうに遊びを続けていた。翔の遊びは他の子の遊びへも良い刺激となり、ジュース屋さんごっこはさらに盛り上がった。その日、午睡前に話をした。まず、なぜ友達が多い日が嫌なのか翔の思いを聞いた。なかなか口を開かない翔だったが、私も根気よく待った。しばらくして私の胸の中で翔は口を開いた。『友達が多いとさあ、遊んでるの邪魔されるのが嫌。』と気持ちを話してくれた。翔の気持ちを聞いてから私は翔へ、『邪魔されたくない時は、今先生に言ってくれたみたいに自分からその気持ちを友達に言わないと、翔君の気持ちは伝わらない。今日のジュース屋さんの時、赤色が欲しくて、友達にわけてって言えたじゃん! そうやって自分の、して欲しい事や・して欲しくないことを言葉で言わないと伝わらないんだよ。今日は良く言えたなあ。えらかったじゃん』と伝えた。そして、今日みたいにジュース屋さんやる時は友達が多いほうが、重たい机だって運べるし、いろんな色のジュースが作れて楽しいよね♪と話をした。

こちらからの意見を一方的に伝えるのではなく、翔が気持ちを言葉にして伝えられるまで待ち、気持ちを伝えてくれてから、この時はどうしたらいいのかななどを、一緒に考え伝えていこう。

母親は、朝の様子を心配していたので迎えに来た時に今日の様子を伝えた。翔の気持ちを聞き、これからどうしていこうか考えた事や、今日の遊びの展開・姿、翔の良い所を伝え子どもへのプラスの関心を高めるよう努めた。母は『よかった～。楽しく遊べて。遊びだしちゃえばいいんですよ。自分が、して欲しい事とかも友達に言えたんだあ。』と言い、安心してた。そして翔の新たな一歩を知ってもらえた。

・ 8、9月と行事・体験活動を通しクラスの団結力が一層高まってきた。翔は、友達に対しても自分の遊びを真似されたり、邪魔されると『翔君が考えたんだから真似しないで』と、自分の意見を少しずつ言えるようになってきた。そして、自分の考えた遊びを友達に教えて一緒に遊ぶ姿も見られるようになり、一人で遊ぶ時間・友達と遊ぶ時間が五分五分になってきた。朝から気分が安定して過ごせる日も多くなってきた。母親と過ごす時間が少ない日は、比較的、一人遊びが多かった。

9月19日 小学校の旗拾い。担任の心配は、1. 母親が時間までに集合しているか。2. 翔が進学する小学校は、翔一人の為、新しい集団に入り参加出来るか。の2つだったが、小学校に着き、集団の中に居る翔をみて安心した。新しい世界への第一歩だった。

その後、自分で同じアパートの小学校の子に『宮沢翔です! 連絡児童になって下さい。』と頼む。母親もこんなに堂々としている翔に驚いたと伝えてくれた。

10月4日 秋の大運動会。母親は結婚式で欠席だったが、おばあちゃん・おじさん・おばさんと参加する事が出来た。翔は、いつも通り、最後まで参加できた。組体操では最後

の見せ場で一番上に乗る翔。練習の段階から、『一番上に立てるっていうことは、下でたくさんの友達が翔君を支えてくれているからだに！』と伝えてきた。

10月13日 翔が私の所に走ってきて『みんなと一緒に鬼ごっこしてくれない！』と言ってきた。理由を聞くと、『みんな鬼やりたくないんだって！だから先生やってよ！』

私は突然の翔の言葉に戸惑った…。こんなに勢いよく、自分の気持ちを言ってきて、どうしてみんながやってくれないのか、友達と話し合っていることに驚いた！

10月14日 友達と楽しそうに遊んでいる翔に、今は一人で遊ぶのと、友達と遊ぶのと、どちらが楽しいか質問をした。翔は『友達と遊ぶほう！』と即答だった。『だって、鬼ごっことか、大縄、ケーキ屋さん楽しいじゃん。一人じゃできないでしょ！』

一人じゃできないでしょ！の言葉が翔から出るなんて！時間がかかったが今まで少しずつ、友達という存在の大切さ、関わりを伝えてきて良かった。この気持ちを持ってくれたことが本当に嬉しくてたまらなかった。

## 5. 考察

今後、小学校へ上がるまでに、嬉しい時や悲しい時に、共に喜んだり悲しんでくれる友達の存在に気づき、友達との関わりを深め、やり取りを重ねる中で、友達の喜びや悲しみにも気づき、他者を思いやる気持ちも育ていけるよう、生活や遊びの中で目に見えにくい心の動きなど、内面の育ちをとらえる事、子どもの活動の結果だけに目を向けるのではなく、どのような興味・関心を持ち、どのような活動に取り組もうとしているのか、取り組んでいるのか理解したうえで、保育を展開していきたいと思う。

まだまだ、保育経験の浅い私にとって、自分の思考をまとめることの未熟さは身にしみたが、記録をとる事で翔の姿、気持ちを見直すことができ、私自身のその時の言葉掛け、対応と、保育を見直す良いキッカケになった。なにより記録を書く事でクラス全体の姿、個の様子が見えてきた。遊びと環境を通して、保育者の在り方、子どもとの関わり・保護者への対応を学ぶ良い機会になったと思う。

## 課題研究⑥ 保育園の事故防止について

### 『保育園の事故防止について』

京都府・山鳩保育園 松本 留美

近年、益々保育現場の中で持久力や体力がなく長い距離が歩けない子、精神力の弱い子、発音が悪い子、大きい声の出せない子、遊びや人間関係の経験が乏しい子などが目立つようになってきている。これらの原因として、車社会による徒歩の減少、朝食抜きの子どもの増加、外遊びの減少、核家族化や少子化による経験不足や社会的未熟さなどと言った時代背景がみられる。

実際、登園時間だけを見ても朝からグズグズ、家が近いにも関わらず車で登園したり、車からの少しの距離でも抱っこして登園といった姿が見られ、しっかりと歩いて登園する子が少なくなってしまう。このような結果、身のこなしが悪く自分の身を自分で守れずに怪我などをしてしまう子が目立つようになったと考える。そこで、山鳩保育園としては、0歳から5歳のつながりを大切に保育園だからできる多くの経験を通し、自分の身を自分で守れる子を育てていきたいと考えている。事故防止には、保育士の危険予知能力、訓練と子どもたちの「身のこなし、瞬発力、危険の察知能力」によって防止できると考え、種々活動している。

#### ① 0歳児

0歳児は、赤ちゃんマッサージで刺激を与えて体の感覚を敏感にし、3ヶ月ぐらいからは赤ちゃん体操をして左右両方にバランスよく働きかけ、コミュニケーションをとりながら保育士との信頼関係を築くようにしている。首が据わり、寝返り、旋回、後進、ずり這い、お座りをして這い這いをする。安心できる保育士のもと一つ一つの段階をとばすことなく働きかけている。大好きな保育士からの呼びかけに反応し、寝返り、旋回をする。少し離れた場所から呼びかけると保育士の側まで笑顔でずり這い、這い這いをする姿も多く、これがたまらなく可愛い。

子どもの成長は嬉しく、出来ることが増えた時の保護者の喜びが我が「コト」のように感じる事ができる。ただ、何でも「出来た」は困る。這い這いを十分にせず、歩くことを喜び、無理に手を引き歩かせようとする親がいる。首も据わっていない子におっちゃん椅子を貰ったからと座らせる親もいる。全て子どもにとっては負担となり、発達の妨げとなっている。這い這いを十分に経験出来ない事で、足腰の弱い子となり、子どもの発達を待たず座らせる事で背骨が丸くなり姿勢が悪くなる。

核家族化の今、親に正しい道筋を知らせていく保育園の役割は大きい。家庭と保育園、

相互からの働きかけが大切となる。そして、0歳後半から1歳前半の頃は這い這いから歩行への移行の時で歩くことも不安定でよくこける。そのためこけた時に前に手をつけるように0歳の赤ちゃんの頃から日々のローテーションを通してローリングマットでしっかり手をつく練習をさせている。大小のローリングマットを子どもの成長に合わせて使い分けて、まずは手を伸ばし前に出すことから始めそこから段々手をつけるようにしていく。幼い頃からローリングマットをすることで始めは全く手が出なかった子どもも繰り返し練習をすることで手を前に出ししっかりつけるようになってきた。

0歳児の今後の課題として、歩けるようになるとなかなか這い這いができなくなる子どもが多い。トンネルや保育士の股くぐり、保育士が園児の上にかぶさり、親子亀のように一緒に這う等で楽しんで這い這いができるようにはしているが、這い這い期が短く不安定な子どももいるので他にもやり方を考えていかなければいけない。また這い這いで顔が上げられずサークルにぶつかる子どももいるのでアザラシ等で首をしっかり（三叉神経）させ顔を上げることをさせていくと共に、手をしっかりついて前を見て進むという正しい這い這いが身につくよう根気よく働きかけなければいけない。

## ②1歳児

1歳児は、歩行がまだ不安定であるが探索したい気持ちが先行して、何もない所でこけたり、足が上がらずにつまずくといった転倒がよく見られる。また、転倒した時に手をつけず、おでこや鼻をぶつけてしまうこともよく起こる。そこで1歳児では、正しい歩き方を習得し転倒やつまずきが減少するような、探索活動に力を入れて取り組んでいる。活動の内容としては、這い這いでの園内散歩や斜面の昇り降り、でこぼこ道歩き、ミニハードルの数を少しずつ増やしてみたりや巧技台とはしごを使ったはしごまたぎなどによる足をしっかりと上げるといった活動に力を入れている。斜面の昇り降りやでこぼこ道歩きでは、足を踏ん張り自分の体重を支えながらすることで足腰の強化につながったり、バランスをとれるようにしている。ミニハードルや巧技台のはしごまたぎでは、足をしっかりと上げて歩くことを意識できるよう高さを段々と高くしてみている。取り組み始めたころは、すぐにミニハードルを倒してしまっていたが、日々の体育ローテーションに取り入れたり、雨の日の部屋での体育的遊びに取り入れることで、今ではほとんどの子が倒さずに歩けるようになった。

長椅子（横幅25cm・長さ120cm・高さ30cm）渡りでは、始めは手をつくものの、お尻を持ち上げられず、お尻で前に進む子が多かったが、ローテーションで毎日行うことで、今では腕の力だけで前に進めるようになってきた。アザラシも、始めは体が支えられず、すぐにつぶれてしまったり、肘が曲がってしまっていたが、毎日繰り返し行うことで、肘をしっかりと伸ばし体を支えることができるようになってきた。

1歳児の今後の課題として充実した環境を使いこなし、探索活動を十分楽しませてあげ

ながら、歩行の完成を目指していきたい。

### ③ 2、3 歳児

2、3 歳は歩行の機能が一段と進む時期であるがすでに安定した歩き方の子もいれば、ふらふらと地にしっかりと足のついていない歩き方の子もおり、少しの接触や平坦な道でも転倒の恐れがある。そこで、1 歳児でもしていた階段や斜面の昇降などの足腰の強化につながる活動を引き続き行っている。何度も経験することで慣れ、足腰が強くなったようで、上るスピードは速くなってきた。そして走ることも楽しみはじめるが、こける姿やまっすぐ走れない姿も目立っている。まだ、腕も前後に触れないので、どうしてもリズムがばらばらになってしまっている。分解して、1. 右手（腕）のみ振る。2. 左手（腕）のみ振る。3. 両手（腕）振ると行ってみるものの腕を後ろに振ることが難しいようで、前だけの腕振りとなってしまう。肩を柔らかくするために、今後は腕を後ろにする方法を取り入れていきたい。また、2、3 歳児クラスでは、春から“一列で歩く”ことを目標に活動しており、一列で歩く経験をすることで、個が確立され、また人間関係での広がりや、まっすぐが気持ちいいものであるという感覚を身につけられると考えている。2 歳児では、まず一列で並ぶことから始まり、友達の後ろに並ぶということを理解するまで 2 ヶ月かかった。保育士が「ここだよ」と知らせるの集合が「集合」の合図で、すぐに一列で並べるようになった。とっさに動け、集まれる力をつけることで避難時、緊急時に役立つことができる。そして今、歩くことに取り組んでいる。まだまだ感覚がつかめず、前との距離が近すぎてトラブルとなったり、よそ見をしてなかなか歩けないという問題点があるが、3 歳では、他児とぶつからずに歩け、転倒防止にも役立っていると報告があった。集団生活を行う上で少しのルールがあると、子どもたちもスムーズに動くことができ混雑からの事故、けがの防止につながっていくと感じる。

2、3 歳の今後の課題として、正しい歩行の完成に向け、苦手なところは分解して経験させる。仲間意識が芽生え、集団遊びも楽しめるようになってきたので、簡単なルール、約束があることを知らせる。

### ④ 4、5 歳児

4、5 歳児にもなると、身体をコントロールする力がつき、ダイナミックに動かせるようになるが、まだ全体的に見て、身のこなしやバランスの悪い子どもは多い。この原因の一つに乳児期からの基礎基本となる運動不足が考えられる。また、子どもによっては取り組む内容に発展を感じられず、見出せず消極的になることもあった。どうしたら子ども自身、自発的に熱中できるのかと考えた時に、今取り組んでいるドッジボールがとび込んできた。

我が法人の保育園は 4 園あり、1 昨年から年 1 回 4 園合同のドッジボール大会を開催し

ている。今年度は1チーム12人編成で全8チームの戦いとなる。決戦は11月17日、一つ目標に向かってクラス一丸となり燃え、外に出て体を動かすことを楽しんでいる。子ども達は「今日はドッチボールできる」と毎日のように担任に聞き、担任からも「子ども達は本当にドッチボールが大好き」と聞く。最初はボールの特性が分らずボールの動きを予知する事が難しく、バウンドするボールに苦戦する子ども達。ボールを取り合い線からはみ出る姿もあったのが、繰り返し行うことで身体をコントロールする力がついてきた。また、4、5歳混合クラスということもあり、前年度4歳児で経験していた子は5歳児となりすぐにドッチボールのできる体となっていた。また、ゲーム的要素が含まれ刺激されることも良い効果を生んだ。

ドッチボールには遊びの大切な4つの要素、模倣・反復・競争・冒険が全て含まれ、子ども自身自発的に熱中参加できるものとなっていた。「おもしろかった」「またやりたい」が体を動かす原動力となり、身のこなしを良くする元となっている。

4、5歳の課題として、運動の得手不得手で能力差が一段とはっきりしてくる。動くことが苦手な子はどうしても静的遊びになりがちであるが、原因を追究し克服するきっかけ作りをする事で、運動を好きになったり自発的に参加できるようにしていく。

こうした事故防止のためには、まずは自分の体を「しなやかに、自由に使える子」をモットウに活動を展開し、少し位危険な環境での遊びも必要と考えている。そこで、事故防止には保育士の見目を養うための危険予知トレーニングやヒヤリハットがあるが今回は、体育グループが主体となって「自分の身を自分で守れる子ども」をテーマに取り組んだ。

保育園の特性を生かし0歳から5歳のつながりを大切に考えている。

最近の気になることとして、走り方の汚い子がいるということがある。手、足のバランスがとれず、今にも転倒してしまいそうな走り方である。5歳の今の形にたどり着くまでにきっと必要な事が抜けていたのだ。今、直すのは大変な時間と労力を要するが0歳から育つ道筋をしっかり抑え確実に順序よく働きかけていくことによって自然に正しい働きとなっていく。

保育園は0歳から5歳の全ての年齢をあずかっている。異年齢のつながりがあるからこそ、今大変なことを声上げ、そうならないためには下のクラスで、「ここをしっかりとっておこう」と、クラスを超えて園全体で育てていく事である。動きや走り方の下手な子が目立っていると声が上がった今、2、3歳では歩くことから再び見直し、立つ、座るなどの基礎運動の定着をさせ、0、1歳児では這い這い、四つ這いで足腰強化や、保育士の膝の上でジャンプを十分させることで足腰の強さをはかり、弱い子には、個別で這い這いや昇り降り運動でたくさん体を動かしていく。そして0歳児では、動く関節全てを動かしながら「マッサージ」や「タッチケア」をして、絆を深めながら体を作っている。一つの目標に向かって全クラスが責任をもって取り組んでいる。「どうでもいいや」は子どもにも

伝わる。「この子のここをこうしたい」と思う強い心が必要なのである。

また、園内の環境について何度か出てきているが我が園には階段や段差が多く、その構造はとても複雑である。初めて山鳩保育園に来た保護者は、決まって「迷路みたいですね」と話され何度か「玄関はこちらです」と案内もした。しかし何年もこの園にしていると、この迷路は本当に素敵だと感じる人が多い。子どもの足腰を鍛える場所がいくつもあることが最大の魅力である。

雨の日には工夫して階段全面に大型ソフトマットを敷き、斜面を作るクラスもある。いつもと違った環境に子ども達は大騒ぎをして室内でも十分に身体を動かせることができている。今では平らな構造が多い中、様々な形が組み合わさった我が園は身のこなしを良くするために適していると言える。ただ、使いこなせていなければ意味がない。

子どもの何を育てたいか明確にしたうえで活用していきたいと思う。そして数年後にはカッコいいと感じられる走り方が園庭中を駆け回っていることを願っている。

山鳩保育園の研修6グループ（食育・造形・音楽・体育・遊び・絵本）はそれぞれの活動の他にリスク表の作成も行っていた。毎月、乳児・幼児の姿をもとに子どものもつリスク、職員のもつリスク、施設のもつリスクの3項目に分け、毎月1つずつ計3つをメモに書いて貼っていき、全6グループ分、毎月36枚が増やされていった。

3月にはその重みで今にも落ちそうなくらいの量となり、1年をかけて完成させた（図1）。毎月の会議では考えられるリスクを出し合いその具体策をみんなが考える。考えることで意識が高まり、結果事故防止にもつながっていった。

また、20年度末には事故、ケガの集計も行い、「曜日・時間・場所・ケガの内容」を調べてみた。結果、月曜日・木曜日が圧倒的に多く、朝・夕の延長時間帯、保育室でのケガ（乳児は転倒、幼児は不注意によるケガ）が目立った。そして、同じ子が何度もケガをしていることもあり、特徴としてやはり、身のこなしの悪さがあげられた。

保育室での事故が多く我が園では、ヒヤリハットから保育室の見取り図に危険箇所を記入。実際に起きた事故をもとに赤色で再度記入し現在も部屋に貼ってある（図2）。クラス数が多い分、使い慣れていない部屋でも表を参考にすれば一目で危険箇所が分り、意識をしながら保育ができるようになっていく。身のこなしが悪い子が多いからケガが起こる。それも強く言いたい、保育士の見方が悪ければ事故は起こる。当たり前である。保育士、子ども共に弱い部分を出したところから最初の一步は始まる。事故ゼロを目指して日々努力していきたい。



### 『いつきへの憧れ～ももの友達関係を育む大きな一歩～』

長野県・明星保育園保育士 串原 綾香

#### 1. はじめに ( )内=(年齢, 月齢)

4月、1歳からの継続児15人と新入園児6人の計21人でスタートした2歳児クラス。保育室は2階から1階となり、担任も私以外は新しい先生となり、慣れない環境に戸惑う子ども達も多かったが、今では元気いっぱい、笑顔いっぱいの個性豊かでかわいい子ども達の声がクラス中に響いている。

私は去年の1歳児クラスの子も達を持ち上げる事ができ、新入園児も迎えて2歳児になった子ども達が多様な成長を見せてくれるのか日々とても楽しみに生活している。

4月当初、1歳児クラスからの継続児だったもも(3.6)【仮名】は新しい保育士に慣れる事ができずに泣けてしまう事が多く、持ち上がりの担任である私からなかなか離れようとしないうちが続いていた。私が用事で部屋から出て行こうとするものなら、エプロンの裾をギュッとつかみ、目にいっぱい涙をためてその手を離そうとしないうち。延長保育で他のクラスの先生方が入って下さった時には担任から離れられず、大泣きのもも。

“去年もそうだったなあ…”と昨年私が初めてももの担任になった事を思い出した。

慣れない私がそばに行くと、警戒して後ずさり…。戸外遊びの時には、私が靴をはかせたり、帽子をかぶせようとするものならば大泣き。ましてやオムツ替えも「ギャー」と泣き叫び、簡単にはさせてもらえなかったが、持ち上がりの保育士がそっと寄り添う事で安心していた。私も早くももと仲良くなりたいと思い、積極的にスキンシップをとったり、1対1の関わりを大切に過ごしていけるようにした。すると、自分から私のところへきてくれたり、オムツ替えも抵抗なくできるようになっていった。

そんな事を思い出しながら、他の子ども達よりも新しい環境に慣れるまで時間がかかるももを、焦らずゆっくり慣れていけるよう援助していこうと思いながら日々過ごしていた。

そんなももが5月の排泄の自立を機に、保育園での姿が少しずつ変わってきたのである。

母親が排泄面についてとても敏感で、神経質になっていた事もあり、もも自身も排泄面において敏感になり、行くのを嫌がったりもしていた。しかし、ももが大好きなプリキュアのパンツを買ってもらった事をきっかけに、トイレに行くのも抵抗がなくなり、すぐにオムツが取れてしまったのだ。

排泄の自立によって自信がついたのか、ももの表情もとても穏やかになった。延長保育の際も、他のクラスの先生ともスキンシップをとったり、楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになり、「最近ももちゃんなんか活発になってない?」「表情も明るくなったよねえ!」と声をかけてもらえるようになった。

友達との関わりについては、4・5月は一人遊びをしたり、保育士との関わりを多く求めている状態が続いていたが、排泄の自立を機に、少しずつ友達との関わりも見られるようになっていた。

そんなももがいつき(3.4)【仮名】の存在によって大きく変わろうとしていた…。

## 2. 実践記録 □枠=保育士の主観及び独白

### 8月20日～ペットボトルキャップを仲立ちとして～

朝、いつきがペットボトルのキャップをたくさん持って登園してくる。保育園で行われている、キャップを集めてワクチンに変えようという環境活動の一環から、そんな登園風景が見られるのもしばしば。

いつき 「せんせい、これプールにいれたいんな!」とうれしそうにペットボトルキャップの入ったビニール袋を見せてくれた。

えっ!?プールに入れる?またおもしろい発想だなあ～!

うーん…困ったなあ…でもおもしろそう…!?

いつきは、自分で新しい遊びを見つけて遊んでいける、2歳児クラスの中での遊び博士だ。いろいろな面白い発想を持っている。

午前おやつの時間になったので、一旦キャップは預かっておく事にした。

プールの時間になり、「せんせい、キャップちょうだい!」とキャップの事をちゃんと覚えていたいつき。“よっぽど遊びたかったんだろうな”と思い「よしっ、じゃあ入れてみるかあ!」と、プールにキャップを浮かべてみる事にした。いつきはすかさず浮かんでいるキャップをビニール袋に集め、全部集まると再びプールに浮かべていく。そんな事を何度か繰り返していると、他の子たちが興味津々で見に来る。ももも気になる様子でいつきに近づいて行き、「ももちゃんもあそびたい～!!」とみんなと一緒にキャップを触った瞬間…

いつき 「ダメ!さわっちゃダメ!!いっくんの!!バカ!!」と大きな声で怒ったいつき…

保育士 「いっくん、そんな大きな声で言うとみんなびっくりしちゃうよ!

いっくんが持ってきたもんで、一人で遊びたかった?」

いつき 「うん。」“そうだよなあ～”と思い、いつきに共感する。そして、

保育士 「このキャップ、いっくんがおうちから持ってきてくれたんだよ!ジュースとか飲んだ時に集めてくれてたんだって～!いっぱいあるね!

遊んだら、最後にいっくんに戻してあげられるお友達おる～?」

と、全体に向けて話をしていく。すると、「はい」とあちこちから返事が聞こえてきた。

保育士 「いっくん、みんな遊んだらいっくんに返してあげられるって言うてるんだけど、  
どうかな…貸してあげれる？」

いつき 「いいよ！」と意外とすんなり答えてくれたので拍子抜けしてしまった。

保育者 「みんな聞いて～いっくん貸してくれるって！よかったなあ～いっくん優しいなあ！  
みんなでありがとして貸してもらおうね！」

子ども達 「ありがとー！」

いつき 「いいよー」

そんなやりとりをしながら数人で、キャップを仲立ちにして遊んでいく。いつきの使っていたビニール袋がやぶれてしまったので、水きりも兼ねて今度はカゴに入れて遊べるよう、カゴを用意する。するといつきといっしょにカゴにキャップを集める子、端に持っていき、水を汲んでいる子、ジョーロやカップに入れて遊ぶ子などそれぞれ自分の好きなように遊んでいく姿が見られた。

ももは、いつきと一緒にカゴに入れたり浮かべたりをして楽しんでいく。

キャップ一つにしても、一人ひとり違った遊び方をしてておもしろい！

ただのペットボトルキャップだけど、それぞれ何かに見立てて遊んでいる。  
みんな発想も豊かになって、みたて・つもり遊びが上手になってきたなあ！  
こういうイメージが固定されない素材を取り入れていくと子ども達の反応が楽しいな～

最後にはみんなでお片付け競争！一つも残らずいつきの持っていたカゴに入れることができ、いつきも満足した様子だった。

### 8月24日～ペットボトルキャップからの遊びの広がり～

朝、ももがいつものように登園してきた。よく見ると手にはたくさんのペットボトルキャップの入ったビニール袋が下げられていた。

保育士 「あっ！ももちゃんキャップ持ってきてくれたの？ありがとね！重かったら～」と受け取ろうとするが、渡すのをしぶっている様子のもも…。母親にもお礼を言うと、「先生、もしかしたらもも、手放さないかも！この前いっくんと遊んだのが楽しかったみたいで、もももプールで遊びたいのかもなんですよ」とこっそり教えてくれた。

なるほど～！そういうことか。

この前遊んだのが楽しかったし、いっくんがうらやましかったんだろうなあ！

それにしても、自分も持ってこようと思うとは…考えたなあ！

ほんとによく見てるんだなあ～！まあいいや、様子を見てみよう！

午前のおやつの際にも手放さないもも。

保育士 「ももちゃん、おやつ食べる時キャップ持っているとおてて使えんくなっちゃうで、先生預かっといてやるなあ！」

もも 「たかいとこ おいといて！」

保育士 「うん！わかった！ここ置いとくね！」と棚の上に置く。

ももは、大事なものを高い所に置いておく事が多い。そこなら友達に取られてしまわないだろうと思うのだろう。置かれたのを見て、安心したようでおやつを食べていった。

おやつを食べ終わった後、次の活動がプールだったため子ども達は水着に着替えていく。

そんな中ももは、食後すぐに「せんせい、フタちょうだい！」と私のところに来た。

“やっぱり覚えてたか〜”と思いつつも「うん！取ってあげるね。でも、これから水着にお着替えするんだけど、フタ持っているとお着替えできなくて、着替えちゃってから渡してあげるね！」と伝える。すると、急いで着替え始めるもも…

やっぱりキャップで遊びたいんだ…！遊ばせてあげたいけど…  
これからみんな持ってきちゃったら困るしなあ…  
今日が最後って事で思いっきり遊ばしてあげよう！

プールに入れるのは今日だけという事と、ちゃんと片付けをするという事を事前に約束し、プールに入れて遊ぶ事にする。

もも 「せんせい、カゴちょうだい！」

お〜!! いつきが遊んでいたところよく見てたんだな〜。同じように遊びたいんだ！

カゴを渡すと早速カゴの中にキャップを入れ、この前の水の中に浮かべてみる。すると、プワ〜とキャップがプール中に広がってしまう。慌てて拾い集めるももだったが、それを見つけた他の子たちが拾おうとすると…

もも 「ダメ！ダメ！ももちゃんの!!」と怒りながら触らせないように急いでキャップを集めていく。

この前のいっくんとおんなじ！やっぱり“自分の！”っていう意識が高いんだな。  
よし！じゃあ今日は、今までクラスみんなが持ってきてくれたキャップを全部浮かべてみんなで遊んでみよう！

他の先生方とも相談し、みんなでキャップを浮かべて遊んでみる事にした。大量のキャップがプールに浮かび、すくってもすくってもなくなる！喧嘩やトラブルになる事もなく、ゆったりと落ち着いて遊んでいく事ができ、それぞれ思い思いにキャップを使って遊んでいく。

しばらく遊んでいると、ゆうと (2. 11) 【仮名】がカップにキャップを入れて「はい、

どうぞ！」と私のところに持ってきてくれた。“何か作ってきてくれたんだな”と思い、お客さんになりきり、ごっこ遊びに参加してみる事にした。

保育士 「何持ってきてくれたの？」

ゆうと 「おちゃ！のんで！」

保育士 「ありがとう！のどかわいとったもんでおいしいな～」

その後、他の友達にも配り歩いていくゆうと。

そんな姿を見ていたのか見ていなかったのかはわからないが、ももも私のところへ「はい、どうぞ！」とキャップを持ってきてくれたのだ。

保育士 「ももちゃん何持ってきてくれたの？」

もも 「おにぎり！いっぱいあるに！」とカゴの中からたくさん出してくれる。

保育士 「わあ～ありがとう！おいしいおいしい！」

私が食べる真似をしている様子をニコニコ見ているもも。

するとそこへゆうとがやってきて、ももにも「はい、どうぞ！」とお茶を持ってきてくれた。

おっ、イイじゃんイイじゃん！キャップをいろんな物に見立ててごっこ遊びができそう！

さっきは私が食べる役になったけど、今度はももが食べる役になるのかな！？

子ども同士ではどんな風に展開していけるのか楽しみ！少し見守ってみよう。

ところが、私の期待とは裏腹にプイっ！とそっぽを向き、ゆうとと関わりを持とうとせず違う場所へ行ってしまったももだった…。

あ～残念…。この時私も一緒にごっこ遊びを楽しみながらうまく仲立ち出来ていれば、もう少し遊びも広がっていたかもしれない。子ども同士の関わりを大切にしていきたいと思っているけど、私達がどこまで入り込んでいいのか…遊びを発展させてあげたいけど、リードしすぎない距離感っていうのがなかなか難しいなあ…

### 3. まとめ

ももの記録を取っていく中で、どんどん変化し、成長していく姿を感じる事ができた。4月とは比べ物にならないほど運動面でも活発になり、意欲的に挑戦する姿もたくさん見れ、行動範囲も広がってきたもも。自分の思いを伝えたりもできるようになり自信もついてきて、対人面でも少しずつ身近な大人や友達とのつながりが広がってきている。また、“いつきと同じものが欲しい！”“いつきと同じ事がしたい”と、そのような思いを持ち自分だけではなく、周りにも目を向けられるようになった事は大きな成長だと感じ、これだけでもももの世界が広がってきているという事をとてもうれしく思う。

今回ももの成長を追っていく中で、イメージーションが広がり、みたて・つもりがより

豊かになる2歳後半から3歳児にかけてのこの時期に、どれだけイメージを膨らませてあげられるのか、イメージが固定されないような柔軟な素材をごっこ遊びのおもちゃとして用意していく事の大切さを感じた。今回はペットボトルのキャップがその役割を果たしていたが、遊びの中で一人ひとりが自分が今までの経験してきた事を基に、キャップをお茶やおにぎり等に見立てていく事ができていた。これからの豊かな人間関係を築いていく基礎になる、みたて・つもり遊びを今の時期にたくさん経験していく事が、これからのごっこ遊びの広がりや豊かさにつながっていくだろう。

まだまだ友達とイメージを共有する力が未熟な面もあるため、保育士の仲立ちによってイメージがつながり、ごっこ遊びへと発展していく手助けをしていきたいと思う。しかしその際には、保育士のイメージを押し付けるのではなく、子どものイメージを大事にしながら相互のつもりがつながり、発展するよう働きかけていきたいと思う。

これからももが友達とのつながりの中で、どんな成長を見せてくれるのかとても楽しみに思う。



---

## 2. 総評及び講評

---

### 〈研究奨励賞〉

- ・課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『食育を通して育む思いやりの心—地域ぐるみで進める食育活動—』  
大宜見 正代（愛心保育園・沖縄県）
- ・課題研究⑦ 地域伝承を通じた取り組みについて  
『地域伝承を通じた取り組みについて』  
中積 智子（山鳩保育園・京都府）

### 〈実践奨励賞〉

- ・課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『食事・食育に関する取り組みについて』  
足立 由希子（山鳩保育園・京都府）
- ・課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『豊かな感性を育む「食」を目指して』  
佐藤 郁子（いちご保育園・長崎県）
- ・課題研究④ 遊びと環境について  
『遊びと環境について—集団遊びを通して協調性を培う—』  
清水 優梨奈（明星保育園・長野県）
- ・課題研究⑥ 保育園の事故防止について  
『保育園の事故防止について』  
松本 留美（山鳩保育園・京都府）
- ・自由研究 『いつきへの憧れ—ももの友達関係を育む大きな一歩—』  
串原 綾香（明星保育園・長野県）

### 〈報告奨励賞〉

- ・課題研究① 乳児の保育について  
『乳児の保育について』  
山下 沙苗（山鳩保育園・京都府）
- ・課題研究② 配慮が必要な子どもの保育について  
『配慮が必要な子どもの保育について』  
倉谷 教子（山鳩保育園・京都府）
- ・課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて  
『栄養士の子育て支援—保育園給食の役割について—』  
小町 直宏（西東京市立みどり保育園・東京都）
- ・課題研究④ 遊びと環境について  
『自発的な集団遊びに向けて—おままごとを通して—』  
手塚 千佳（秋和保育園・長野県）
- ・課題研究④ 遊びと環境について  
『遊びと環境について』  
西濱 裕子（山鳩保育園・京都府）
- ・自由研究 『保育現場におけるカウンセリングアプローチの試み』  
廣田 敬乃（中居林保育園・青森県）
- ・自由研究  
『心と心のふれあいを深める思いやりの輪—思いやりを引き出す関わりを通して—』  
玉城 久美子（第2愛心保育園・沖縄県）



## I. 応募状況

特徴的な事として、同一保育園のグループ活動として取り組んだ成果を、それぞれまとめた報告と、テーマ保育についての継続研究が寄せられたのである。

1. 課題研究では、「食育」と「遊び」に応募が集中する傾向が続いている。特に「食育」は、保育所の研究活動として組織的に展開でき、一定の成果をプレゼンテーションでできることが、応募動機となっているものと考えられる。

2. 自由研究では、基本である発達記録をベースにした事例研究、園児の相互作用分析、さらにカウンセリング技術の保育現場へ導入をはかるとする問題提起的な報告がなされた。

## II. 審査状況

### 1. 評定

評定が大きく割れた作品はなく、課題研究群と自由研究群は、段階評価はともにBランクと位置づけられたが、点数評価としては課題研究群が上位であった。

なお受賞候補にノミネートされたのは、課題研究の部—食育の「クラスの食育活動（足立由希子）」、「完全給食体制（佐藤郁子）」、「テーマ保育としての食育（大宜見正代）」、遊びの「環境構成（清水優梨香）」、事故防止の「体育（松本留美）」、地域伝承の「絵本（中積智子）」、自由研究—「事例研究（串原綾香）」で、しぼり込まれたのである。

### 2. 選評

保育所の保育活動を背景とする研究報告が大勢を占めるなか、課題研究の部から遊びに関する手塚報告（長野県：秋和保育園）が、場面設定と保育メディア、ならびに行動観察、自由研究の部から友達関係に関する串原報告（長野県：明星保育園）が、注釈文体による記録によって発達過程を追ったものである。分析や論述に問題を残すが、保育士の専門性に関わる内容であり、実践研究にふさわしく収穫であった。

## III. 総括

増加する待機児童から、保育所に定員超過、最低基準の特例措置など、いくつかの要件と派生する問題に直面する。その困難をかかえる大都市部からの応募は皆無である。悪化する保育環境での取り組みを客観的に伝えるデータなしには問題解決につながらない。確かに労働条件の低下をもたらしているだろう保育現場に時間の余裕がないのも事実であろう。しかしながら、子どもの声を代弁し、子ども達の最善の利益を守り、人権を擁護する事は、保育士の専門職としての機能である。厳しい現実にあっても、敢えて保育士の奮起を期待せざるを得ない。

## 研究奨励賞

課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『食育を通して育む思いやりの心—地域ぐるみで進める食育活動—』

大宜見 正代（愛心保育園・沖縄県支部）

## 講評：藤澤 良知

食べることは、生きることであるとの視点に立って、楽しく食べるなど4つの目標設定（楽しい食事、正しい食生活、会話、果物・野菜を育て収穫など）のもと調理員と保育士との連携による食育に取り組んでいる。

目的設定は、食べる意欲を育て、食事の大切さを知る。クラス別テーマの設定では、果物、野菜など育てることを通して地域との交流を深めることを目的としている。0歳から5歳児までの各年齢発達段階別に、食育のテーマを設定して、具体的な実践活動に取り組んでいる。0歳児では、食に対する意欲を育てる、1歳児ではよくかんで美味しく、2歳児では心で感じ表現する食事・味覚を知る、3歳児では、食事はみんなで楽しく、また、三角巾を付けて配膳の手伝い。4歳児では、食で元気なパワー、5歳児では楽しく食べて元気な子、プランターでなす、ミニトマト、オクラ、ツルムラサキなどを育て、生きた教材として活用している。

園全体の取り組みとしては、食育班を中心に紙芝居による食事の大切さ、ふれあい農園での野菜づくりと講話をされている。2歳児から当番活動として、食材の名前の紹介、栽培活動を通して土との触れ合いに努めている。

今後の課題として、クッキング活動の充実、食への興味・関心を高める、地域との交流を深める、無関心な保護者への対応などに努める。食べることの楽しさは、心のゆとりと人を思いやる優しさを同時に育むことを念願に推進するとしている。

このように、本研究は、しっかりした目標設定の下、年齢発達段階に応じたテーマを決めて取り組んでいるが、今後とも新しい視点のもと、評価活動も取り入れていきたい。

この研究は、子どもが楽しく食事ができること、食べることの喜びや意欲、人との豊かなふれあいを大切にすることを目標にして食育を実践したことの報告です。形式もきちんと整えられ実践の目的や内容、経過がわかりやすくまとめられています。実践内容も自然で無理のない形で豊かな環境を配慮されていることがうかがい知ることができました。

各年齢別によるテーマも、

- ・ 0 歳児（食に対する意欲を育む）
- ・ 1 歳児（何でもよく噛んでおいしく食べよう！）
- ・ 2 歳児（心で感じ表現する食事・味覚を知る）
- ・ 3 歳児（おいしい食事をみんなで食べる）
- ・ 4 歳児（元気な命のパワーをもらおうぞ！）
- ・ 5 歳児（楽しく食べる元気な子）

と挙げられています。どのテーマも子どもの心を大切にしたものになっていることがすばらしいと思います。また、食育は日常の何気ない生活の積み重ねの中にその意味を見出すことにあるとおもいますので、そのような視点においても生活にねざした実践になっています。ただ、残念なのは考察が主観的な感想で終わっていることです。実践研究の場合、実践者の振り返りこそが、さらなる保育の発展のエネルギーと代わるものです。今後の報告を期待したいと思います。

## 研究奨励賞

### 課題研究⑦ 地域伝承を通じた取り組みについて

『地域伝承を通じた取り組みについて』

中積 智子（山鳩保育園・京都府支部）

## 講評：野坂 勉

この報告は、プロジェクトとして地域伝承に関わる要素を取り出す活動記録をまとめたものである。

### 1. 地域活動事業としての実践

社会連帯感が稀薄化するなかで、地域感情を醸成する「伝承」を受け継ぐ存在として、保育所に注目が集まることになった。高齢者による童歌、遊戯、玩具の実技など伝承活動が盛んになる。それが特別保育科目として設定され、補助事業対象ともなったのである。

- ①地域の「言い伝え」が子ども達のイメージとして具象化され、絵、歌としてメディア化、あるいはメディア作りとして展開する事は、刺激的である。このメディア活動は、多くの地域に草の根的な読み聞かせ、絵本づくりなど、あるいは子ども文庫活動とも連動するものでもあり、評価される。
- ②伝承の舞台装置ともなる、「流れ橋（木造）」を渡る体験は、地域伝承がリアリティーをもって実感させる事になる。
- ③保育所主体の「敬老のつどい（ディサービス利用者、ならびに地域老人会）」による高齢者との交流活動、あるいは地域の交流行事となった保育所での「夏まつり」、「クリスマス会」が、活動記録となっている。

### 2. 研究報告としての評価

地域伝承に関わる活動報告に終わったのは、残念であった。絵本グループが主体という事であるならば、地域の「言い伝え」をメディア化するというユニークな子ども達の製作過程に、焦点化するなどがあれば、研究的価値を高める事になったと考えられる。

この保育園は複数の法人からなり、研修グループの活動が盛んなようです。研修グループは、音楽・体育・絵本・食育・遊びからなり、今回の報告は絵本グループからのものでした。

保育園は、比較的同じ地域、近い地域の子ども達が集まります。そのことから、今回も子ども達が自分たちの住んでいる京都の八幡市の東に位置する洞ヶ峠にスポットをあて、そこに伝わる伝説を基に、子ども達の言葉を集めて紙芝居を作ったという内容の報告でした。身近な環境に焦点を絞り、子ども達のつぶやきを生かしながら、関心を集め、紙芝居や歌を作っていくという、真剣で楽しそうな様子が伺えました。京都という古いものの残る環境を生かし、今となっては貴重な木造橋にも焦点をあて、そこから子ども達の発想を広げていく様子が手に取るように読み取れました。地域のおじいさん、おばあさんや、民生委員の方達との交流は、保育園の行事を通して何回も行われているようでした。その行事の際の様子も、報告書から生き生きと伝わってきました。

日本は歴史文化の深い国です。そのことに子ども達と改めて向き合い、理解を深めて分かりやすく伝承していく、また、その実践をしっかりとした報告として残して欲しいと思います。核家族がほとんどの現代であることをしっかり踏まえ、保育園という場所が、日本文化の伝統を守り伝えていく拠点にもなってくれればと思いました。

## 実践奨励賞

### 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『食事・食育に関する取り組みについて』

足立 由希子（山鳩保育園・京都府支部）

## 講評：藤澤 良知

この調査研究は、食育は人間的な信頼関係の基礎を育む営みであるとの発想に立った、食育グループ活動、クラス別の実践活動である。研究目的として、現代の食生活は、食べ物が食べやすくなった、砂糖、油脂の摂取増、質の変化、食の洋風化、保存法の変化等を取り上げ、問題点の改善に取り組んでいる。

食育の重点事業として菜園計画を取り上げ、土づくり、種まき、収穫、園内探検で栽培物に興味を持たせる。

フィッシュパーティとして魚の切り身しか見ていない園児に、丸ごとの魚はどんなものか、園庭で魚の網焼きをする。兄弟グループ活動として、3・4・5歳の縦割りで兄弟グループを作り、ランチルームで一緒の食事、ふれあいを深めるとともに、食に対する意欲を高める活動をしている。

また、地域の方々との交流を深めるため、保育園での親子クッキングで親子の絆を深める、ハロウィンパーティでは南瓜のデコレーション、衣装作り、くりぬいたかぼちゃの利用、また、グループの梅美台保育園での園芸活動として、高校生と一緒に種まき、水のやり方の体験などで、名前を覚えたり、人間関係を深めている。

クラス別の活動として、給食やおやつ作りとして食材の下処理の手伝いにより、食への関心を深める、体育遊びを通じてからだを動かすことの大切さ、食べる意欲の向上、また、園庭で栽培している野菜を基に、紙芝居の作成にも取り組んでいる。

この研究は、現代の食生活のひずみに目を向け、保育園として出来る実践的な食育を取り上げよく努力されている。継続は力なり、また、新しい視点も取り入れて頑張ってください。

この山鳩保育園では、0歳から年長まで、様々な食育活動に取り組み、しっかりとした記録を残しています。また、この報告を読ませていただいて、さすが食文化の都、京都の保育園だからかしらなどと感心しました。

それぞれの課題に対して、〈ねらい〉・〈方法〉・〈結果・考察〉に分け、明確に記録されていました。この食育活動は、山鳩保育園1園のみで行われるのではなく、同法人4園にある食育グループや地域の方々や高校生の協力により実践されていました。大きい法人ならではの特色を生かし、すばらしいシステムが構築されていると感心しました。

食育といっても食べるものだけに焦点をあてるのではなく、からだや思いやりの心を育てるところにも着眼し、取り組まれたことについて評価したいと思います。反省・課題についても、保護者への発信が不十分、調理員への配慮などがあげられていましたが、改善策についても提案がなされていました。現在の食育活動に留まることなく、ますます研鑽を積んでいってほしいものです。

保育園は、子ども達が1日の大半を過ごす場所であり、子ども達の成長に大きな影響を与える場所であることは明白なことです。使える時間が長いがゆえに、子ども達と密な体験ができると思います。この食育活動報告からも、山鳩保育園の子ども達の生き生きとした生活が伝わってきます。保育園ならではのこと、保育園でしかできないことを、たくさん世の中の方々に配信していってほしいと思います。

## 実践奨励賞

### 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『豊かな感性を育む「食」を目指して』

佐藤 郁子（いちご保育園・長崎県支部）

## 講評：藤澤 良知

同園は園児数145人（3歳未満児65名、以上児80名）で、栄養士3名で離乳食・アレルギー除去食・普通食の完全給食を実施している。セミバイキング方式の給食方法を取り入れ自分の意思で選択でき、当番が盛り分け、ランチルームに持ち帰っての食事などユニークな配慮をしているが、運営上の問題点はありませんか。

食育目標として、食を通じて生命の尊さを知り、健全な心身を育てる。三食きちんと食べる、偏食がない、食事マナーを守るなどを目指し、園庭菜園（いちご村）での野菜づくりを通して収穫と調理、食べる喜びを体験するなど、明確な目標設定して取り組んでいる。

実践状況を見ると、園庭菜園（いちご村）では季節の野菜・野草の育ちの観察体験、収穫、調理への活用、例えば、4月にはよもぎ採りをして、てんぶらに、よもぎクラッカー作りをして食べる。5月には、竹の子とりと竹の子ご飯、7月には夏祭り、お泊り保育でのホットケーキづくり、カレー、サラダ作りなど月別計画に基づくユニークな取り組みである。

園の10周年記念では、同法人の老人施設と共同の餅つき大会、町内の独居老人につきたてのもちと、園児が作った干し柿、大根漬けを届ける。卒園児（10歳児）を呼んでの2分の1成人式で記念植樹のびわの実とり、タイムカプセルを埋めて10年後の再会を誓う。

アレルギー児に対しては、医師の指示書等に沿った、園長ほか、全職員連携で個人にあったアレルギー食、保育士が専属で食べさせるなどの配慮をしている。

食を通じて心の成長、人やものへの思いやり、自然にふれ、地域の人達、老人との関わりの中から心の成長を図るべく努力している。広範囲な食育の取り組みで感心しますが、項目が多いので、個々の内容充実と継続性、評価が課題と思います。

この研究は一年間を通して園で行われた「食」に関する実践記録である。

園近くに山林と畑があるという立地による利点を十分に活かし、様々な食材の採取・育成から収穫・調理まで子ども達と保育者が共に関わり、4月のヨモギ採りから始まる月ごとに行われる活動が、自然の移り変わりや季節感のある情景と共に生き生きと描写されていた。さらにその一部は、地域住民と保護者を交えた輪を広げる活動につながっており、食への関心を持たせる活動が日常的に充実した内容で行われていることが窺える。

また、自分の意思で選択できる方式を取り入れることで、給食に変化を持たせ、子どもたち個々の食事への意欲を回復させる手法、食物アレルギーや食の細かい子への保護者との連携した対応を実践している姿勢は評価できる。

まとめとして、園児の食を取り巻く環境が複雑になっており、本来楽しいはずの食事が阻害されている現状について、子どもの心への支援が必要として、その原因の除去にまで目を配るべきとの問いかけをしていた。

最近では学校も含め「食育」への取り組みなど、集団給食のあり方が見直されているが、保育所で成される食事本来の姿を改めて見直す必要を感じさせるものであった。

ただ、問題意識について明確に提示されなかったことが残念である。実践報告は内容が豊かで大変好感が持てたが、食育目標の記載と共に、実践を行う事由が明らかに成されていけば一層他への参考になったものと思われる。

## 実践奨励賞

### 課題研究④ 遊びと環境について

『遊びと環境について—集団遊びを通して協調性を培う—』

清水 優梨奈（明星保育園・長野県支部）

## 講評：小林 芳文

この研究は、今保育のみならず、子どもの育成において多くの分野で大変興味性の高いテーマであります。特に、サブタイトルのように「協調性」の乏しい子ども達が、話題になっている時に、その支援においてヒントを出してくれた研究として意義があります。遊び環境が、子どもの心身の正常発達に及ぼす研究に取り組んでいる関係者の一人として、読ませていただきました。

この研究の事例として取り上げた5歳児の翔君（仮名）は、何が主たる問題か、本テーマがどのように立ち上がったかを整理して、合わせてクラスでの本児の様子、生育歴などが細かく挙げられています。これらのきちんとした根拠に基づいて「集団遊びでの協調性」を育む取り組みが、紹介されて子どもの姿が良く伝わって来ました。

当初、一人遊びを好む翔君をじっくり観察、誰も誘ってくれない翔君をどのようにすれば、他児とのつながりが生まれていくか、そのことを見つけた手だてが大変良かったと思います。「新聞紙という身近にある物」を使って、遊びを作っていくことに着眼したこと、これこそ子どもと子どもを結び付ける環境となっているのです。そしてシッポを作って、それで友だちとの繋がりを発展するという、良いアイデアですし、これこそ、今、一緒に遊びができない子どもの保育において、取り入れていかなければならない支援方法を出していただいた研究として読ませていただきました。

保育園での取り組みの半年ほどからみんなが翔君の個性を支えてくれたこと、友だちとのコミュニケーションが、言語という高次な機能まで使えるまで成長してきたこと嬉しく思います。今後の研究の継続を期待しています。

この研究は、集団生活の中で友達との関わりが苦手な5歳児について対応した事例研究である。

問題点の把握や対象児の家庭環境・生育歴など分かりやすく記載されており、事例研究として模範的な整理を成されていた。最近どの保育所にも「気になる子」が存在し、対応の難しさに手をこまねているのが実態であろう。特に近年の家族・社会の変化からか、人間関係の構築に不十分な子どもが多く見られるのではないだろうか。それらの問題を改善しようとするならば、子どもへの対応に留まらず家族の対象児への接し方を含め、相当な時間と配慮が必要となる。また、職員間の連携が大切になり、その際には対象児の情報が適切に記録されていることは不可欠である。往々にして子どもの問題行動に目が行きがちだが、その子の長所を発見することで対応策に幅を持たせることに繋がり、なぜそのような行動を取っているのかを子どもの視点で考えることが大切であろう。

この事例研究では、入所した0歳児からの経過が記載されており、その上に立って対象児を観察し、遊びに変化を持たせたり保護者への声掛けに工夫し、子どもの気持ちを読み取ろうという姿勢が随所に表されていた。さらに、考察では、子どもの活動の結果だけではなく、生活や遊びの中で目に見えにくい心の動き・内面の育ちをとらえ、理解した上で保育を展開する必要性を提示しており、保護者への保育指導を定義としている今後の保育者としての在り方を示している。

## 実践奨励賞

### 課題研究⑥ 保育園の事故防止について

#### 『保育園の事故防止について』

松本 留美（山鳩保育園・京都府支部）

## 講評：野坂 勉

保育園の事故防止というと、園児同士の衝突、おもちゃの取り合いによる受傷、遊戯、移動中の転倒、あるいは給食時の窒息事故、誤飲など、いわゆるヒヤリ、ハットと、危険が隣り合わせ状態にあると報告されている。

この報告は、乳幼児が受動的状況におかれたなかで、事故は発生する事を所与とするリスク管理に対し、園児の主体的条件を変化させ、発達の視点に立つ危険予知、回避行動を身につけさせるとする。

### 1. プログラム内容

各年齢児とも、一斉指導方式を主体に進めているが、観察結果の記述はわかり易い。しかしながら、発達段階と行動化のプロセスについての、科学的な説明は十分でない。これは、エクササイズとして実施している事から、科学的根拠と見通しを立てて、保護者の理解がはからねばならない。そうでなければ、押し付け的保育になる。事故を予防し、園児の単なる負担に終わらせないためにも、必要とされる。

### 2. 標準化

研究目的から、プログラムについての進捗、移行時の行動特徴、手足の協応、言葉がけなど観察項目並びに記録方法などを標準化し、尺度を作成する事が望まれる。これは、エクササイズとして訓練的要素をもつことから、客観的な評価基準を設けて修正・改善する事がのぞましい。

### 3. 安心・安全の保育所づくり

安全確保のための環境条件を備え、保育活動が展開されているという信頼の上に、保育所保育が成立する。そこではリスクマネジメントが作用している専門機能の面から評価されている事でもある。リスクの主体的条件を強化、あるいは緩和して、客体的条件をあわせてリスク管理の向上が期待される。

施設内での事故は、子ども自身の運動能力と危険察知能力の低下が原因であるという視点から事故防止について述べられている。

各年齢ごとの身体的成長・発達とそれぞれの特徴を明確にすること、職員間で定期的な問題点を報告し合い、その場で対応策を協議することで保育者側の危険予知能力を高める手法、年度末に行われる事故の集計・分析、危険箇所を見取り図に記入して情報を共有するなど、事故防止のための具体的例が記載され、他施設の参考になるものであった。

また、今後の課題として、子どもの状態を表現する場合の表記に留意してほしい。また、事故原因として人的要因以外に様々な要件が複雑に絡み合う場合も多く、施設管理も含め多方面に注意が必要になるであろう。



## 実践奨励賞

自由研究 『いつきへの憧れ—ももの友達関係を育む大きな一歩—』

串原 綾香 (明星保育園・長野県支部)

## 講評：野坂 勉

この報告は、社会関係を結ぶ事が困難な園児の観察経過と、援助者としての分析を記録にまとめたものである。

### 1. 事例分析

研究としては、ナマのデータそのものである。それは、観察経過として丹念に追っている点は評価されるが、子どもの成長・発達を助け、促進し、あるいは阻害要因を除去し、成育条件を整えるという援助の視点が不明確な事からくる。すなわちデータ処理が十分でないとみなされる事になる。そして研究目的そのものも、漠然とさせる。

### 2. 記録様式

特徴的なのは、記述として注釈文体をとり入れている事である。ただ主観的で、かつメモ的要素を多くふくむとしても、保育専門職の記録としては、一定のルールを守る必要がある。すなわち、業務日誌、あるいは保育・指導日誌としての範囲以上に、研究報告としては、公共性を持つ記録としての規約、きまりが、それなりにある。本報告の場合であれば、その観察結果にコメントをつけるとすれば、専門的知識に基づき、解釈する内容が求められる。

### 3. 科学的理解

社会関係を結ぶ事が困難な園児の援助が、研究目的だとすれば、問題の背景、原因など全体を明らかにする分析手続がとられなければならない。すなわち問題の成り立ち、あるいは日常生活を困難にし、阻害する要因について科学的理解をはかる必要がある。この種の事例研究では問題発生 of 生育史を中心に事例史的理解を進める必要がある。ただここでは、観察経過と援助者としての分析を、記録として整序する報告である点から、研究レベルを上げる事を、課題として指摘するに止める。

保育園は、幼児の日常の大半を過ごす場であるにもかかわらず、新しい環境に容易になじめずに、不安を示す2歳児についての保育実践報告でした。

進級時、多くの保育現場で見受けられる光景であり、子ども達はそこを通過しながら、多くの事を学び、成長していきます。自我が芽生え、自分の思いを言葉にして伝えることができるようになり始める2歳児。しかしまだまだ語数は少なく、保育士が子ども達を深く観察し、伝えたい事を理解していかなければならない時期だと思われます。

子どもの頭の中にはたくさんの思いがあり、その思いがあふれ出て、上手に伝わらないことに焦れることも多く見受けられると思います。そのような日々の中、あの子の遊んだおもちゃで遊びたい、あの子と同じ言葉を使って話したい、あの子の一番近くにいたいなど、憧れや友達としての位置づけが始まる時期でもあります。

今回の報告では、2歳児のものに対して、担当の保育士の思いや日々の保育の工夫について記録・報告されていました。保育士が日々の保育に追われながらも、子ども達の言葉や様子を細かく見つめ、保育士自身が立ち止まり、考察し、その子どもの成長の糧となるよう努めている様子が伝わってきました。

今までは保育士が当たり前に行っていた、ひとりひとりを大切にする保育というものを、今後、記録として文章に残していかなければならなくなりました。今後、日々の保育をいかに第三者に文章として伝えていくかということも、保育士の大きな課題のひとつだと思います。その力を培う場のひとつとして、この保育所保育実践研究報告を使っていたいただきたいと思います。

## 報告奨励賞

### 課題研究① 乳児の保育について

#### 『乳児の保育について』

山下 沙苗（山鳩保育園・京都府支部）

## 講評：庄司 順一

この研究は、要約して紹介するのがむずかしいです。ていねいな保育を心がけているようですが、日常の実践を文章にしているだけのようです。内容的には、「人とのかかわり」「離乳食」「睡眠」という大きなくくりで分けられていますが、子どもの生活の中でなぜこの3つが取り上げられたのかが記されていません。私たちはこうやっていますという報告だけで、子どもの園での生活や保育士のはたらきかけにどんな課題があったのか、どのように対応しようとしたのか、その結果がどうだったのかなどと整理すると分かりやすいものになるでしょう。

私には「なめまわすような動物的愛」ということばの意味がよく分かりません。子どもとの関係は、保育者からの一方的なはたらきかけではなく、子どもとのやりとり、相互的なものだと思うからです。

このほか、文章も意味をとりにくいところがあります。たとえば、「乳児は生活が遊びだから、つまんで食べることもさせていて、…」などは文のつながりが気になります。

大事な実践をしていると思いますので、それを生かすには、まずもう少し細かく「見出し」をつけてみたらいかがでしょう。そうすると、何を言おうとしていたのかが見えてくるように思われます。せっかく「造形グループ」の方々ですので、2ページ目の終わりのほうから書かれている造形活動、つまりフィンガーペインティングやびわの葉脈とし、色水、版画などにテーマをしぼって、それぞれについて、年齢ごとの活動のちがいや課題、積極的に取り組む子とそうでない子のように、保育者の援助のポイントの観点から整理すると、意義のある研究報告になるのではないのでしょうか。

課題研究として乳児保育の実践について報告されていますが、ねらい、目的、実践の考察などがなされていません。保育内容としては、ていねいな保育を心がけていることは読み取ることができます。しかし実践研究とする場合は、自分達の保育をできるだけ客観的に振り返って検証することで、今後の保育の質の向上につなげていかなければなりません。そのような意味では、形式としても読み手に伝えやすい形にまとめられていないことは実践研究の基本として大切なことでありそれがなされていないことは残念です。

また、実践を振り返る考察がないことも、偏った主観的な保育に陥りやすく保育を高めていくことに繋がり難いので、今後の課題としていただきたいと思います。さらに「先ずは0歳児を一番基本に置き入園児はなるべく家庭で育てていた続きですべてを引き継ぐことを旨とし…（中略）なめまわすような動物的愛を深め…」という表現は、保育内容の表現として不適切です。また、「4、5歳児で諸活動がうまくいかないこと、例えば、立ち居振る舞いがぎこちなく、走れないなど3、2、1、0歳児へと下ろし、どこに問題があるかを調べ解消できるように働き掛けている」と表現されていることは、先にあげた「0歳児を一番基本に置き」という表現と矛盾がみられます。保育指針に示されているように、一人ひとりの発達過程に応じていくということは、0歳児から一人ひとりの成長が保障されるということであって、保育者が目標にした5歳児から下ろしていく保育は保育指針に示されていることに反することになります。今回の報告をもとに、上記に示したことを参考にさせていただいて再考を期待します。

## 報告奨励賞

### 課題研究② 配慮が必要な子どもの保育について

#### 『配慮が必要な子どもの保育について』

倉谷 教子（山鳩保育園・京都府支部）

## 講評：小林 芳文

この研究は、保育園での配慮が必要な子どもの保育を巡って、その取り組みについてまとめた今日、注目されている子ども一人ひとりに目を向けていく保育に関わる研究です。特に、遊びに配慮が必要な子どもがいることに園の保育士が気づき、それを保育園全体の問題としてグループで（遊びグループ）を構成し、その取り組みの状況を考察した意義のある研究と言えるでしょう。遊びの際に配慮が必要な子どもとして、「気になる子」を身のこなしが悪い子、動きが鈍い子、すぐに転ぶ子、他児との関わりが持ちにくい子を中心にしています。おそらくこの配慮児をどのように捉えるか、難しいところであったと思いますが、その点についてははっきりしていたので、取り組みにおいてお互いの共通理解が持て、課題研究として入れてと思います。幾つかの点で、今後の取り組みで検討していただきたいことを挙げてみますので、参考にしてください。

乳児での活動が例の中で「靴早脱ぎ競争」「集合遊び」という保育での課題が、果たして乳児に妥当か気になりました。競争とか号令での活動は、乳児段階では情緒的な発達支援でもほとんどあってはならないからです。幼児でのいす取りゲームも細かく存じませんが、競争のように見られます。遊びの内容が沢山紹介されていますので、子ども達の楽しい遊びの姿が想像できます。遊びグループでの活動で、どのような活動に子ども達が興味があるかをアンケートしているので、これを膨らまして配慮児の保育を進めていただけたらと思いました。今後の課題として「いかに楽しく遊べるか」を挙げてくれています。期待しています。

この研究報告も山鳩保育園からの報告であり、園全体で実践研究に取り組まれているその熱意に敬意を表します。ただ、同様に内容が十分に整理されていないことが惜しまれます。

また、乳児は生活そのものが遊びであり学びでもあるのですが、報告内容では、保育者側がリードする遊びが保育の課題としてあげられています。なかでも“靴早脱ぎ競争”や“集合遊び（集合の掛け声で保育士の前に集まり一列に並ぶ）”というような乳児の遊びは、発達過程に寄り添い、乳幼児の最善の利益を考慮した視点で考えられているといえるでしょうか？さらに年少・年中クラスのところではカルタ遊びにおいて「文字が読めない子どももいるので理解をするのに時間がかかる。文字が読めない子どもには、ひらがな練習をたくさんとりいれていった」という保育内容など、ほかにも保育者の設定した遊びや活動は十分に見えてきますが、子どもたちの育ちの様子がみえてきません。子ども一人ひとりの成長の様子よりも保育者の評価が主になっていることがたいへん気になりました。

今回は、子どもたちひとり一人の興味や個性に目をむけ、子ども自身が主体となってそれぞれのゆたかな発想で遊びが展開されていくような保育実践に目をむけた研究に取り組んでみてほしいと思います。



## 報告奨励賞

### 課題研究③ 食事・食育に関する取り組みについて

『栄養士の子育て支援—保育園給食の役割について—』

小町 直宏（西東京市立みどり保育園・東京都支部）

## 講評：藤澤 良知

同園は平成18年度に公立から民間委託された。栄養士は保育士のように毎日、子どもや保護者に関わらないので、保護者との信頼関係の構築のための方策についてこの3年半講じてきた、取り組みの要点を挙げている。

研究目的として、保育園の食事を通じて保護者との信頼関係の構築、栄養士としての子育て支援のあり方とその成果の検証をねらいとしている。

園としての重点的な取り組み方針として

- ・日本の食文化、特に和食を大切にし、子ども達に伝えていく。
- ・化学調味料を一切使用せず、昆布、かつお節、干し椎茸などの天然の素材を使う。
- ・国産の食材を使用し、安全で新鮮にこだわる。輸入食材、加工食品は使用しない。
- ・保育園で使う調味料はすべて本物にこだわり、天然醸造の物を使用する。
- ・生野菜を消毒して生のままの野菜を味わう。大根、セロリは砂糖、塩、甘味のある天然醸造酢を使い1～2時間つけてから食べる。
- ・アレルギーのある子も、ない子どもも同じものを食べる。卵は基本献立には一切使用しない。牛乳は料理に使用するが、飲むのは週に1回100ccとする。

などアレルギー児対策を徹底的になされている。

また、3年半を通じての取り組みについて保護者の意識変化を知るため、アンケート調査を実施。また、3年半の実践記録では、献立、食事展示、試食会など計画性をもって、年度ごとに取り上げられている。

化学調味料の不使用、調味料は天然醸造のものを使用、輸入食材・加工食品は使用しない、などの徹底は現代の食生活では、難しい壁はありませんか。また、アレルギー児対応は個別対応が望ましく、卵は基本献立に使用しない、牛乳は週に1回100ccに限定するなどは、検討の余地があるように感じます。

本報は市内で初めて民営化された民間委託園の栄養士として、変化に戸惑う保護者との信頼関係の構築という難しい課題に取り組んだ3年半の実践の記録である。

各保育園の食事や献立には、それぞれの理念や方針が具体的に反映されている。保育園の外部から見ている保護者には捉えにくい実際の保育内容と異なり、毎日の食事は目に見える形でこれらを保護者に伝える手段として活用できる。食事を通して保育園が大切にしていることが保護者に理解され、信頼関係の構築につながるという明確な問題意識をもって取り組んだ筆者らの決意と意欲を評価したい。

研究は、お便りや献立の配布、毎日の食事の展示といった日常の実践と活動記録、園行事や試食会における保護者の姿や声、アンケート等による保護者の意識の変化の記録を中心としている。特に、定期的で開催された試食会への保護者の参加状況や様子、その場で聞かれた意見や要望・質問などが時系列で詳しく記述されており、その変化のさまが分かりやすく説明されている。

研究のまとめにおいて筆者が「保護者の理解を得るためには、保育と食事の両面から子どもに働きかけ、子どもの成長した姿を保護者が感じる事が重要である」と述べているように、本研究の意義は栄養士と保育士の連携のもと、園の食事内容を積極的に保護者に伝えていくことが、保護者との信頼関係の向上に広く貢献する可能性のあることを実践によって示したことにある。目的にも掲げられた「栄養士としての子育て支援」をはじめ、保育園における栄養士の役割と可能性については、より幅広い提案と実践、検証を必要とする領域であると考えられる。筆者らには今後も引き続き、意欲的な実践を期待するとともに、全国の保育園からも栄養士や調理師など新たな視点から捉えた実践研究の生まれることを強く期待している。

## 報告奨励賞

### 課題研究④ 遊びと環境について

『自発的な集団遊びに向けて—おまごトを通して—』

手塚 千佳（秋和保育園・長野県支部）

### 講評：小林 芳文

本研究は、基本的な生活習慣がどうにかできるようになってきた年少児を対象に、園での友だちとの遊びを広げる楽しさをどのように深めていくことができるか、その集団性と結び付けた興味ある研究でした。保育とは、子どもの遊びを大切にした養育で、その遊びで大きな成長・発達の財産に膨らましていく大変重みを担った仕事です。この研究のテーマは、その在り方を示してくれた意味のある研究として読ませていただきました。研究方法は、環境づくり、楽しさ、遊びの変化、異年齢の交流を挙げています。それをどのように年少児の「環境設定」にするかで、「コーナー遊び」と称した子どもの多様な遊びを設定したこと、子どもの興味性を参考にして環境設定をしたことが見事なアイデアです。

事例を取り入れて分析、考察したことが、研究の深みになっています。遊びの広がりที่ไม่十分な事例での保育士の関わりの在り方、お店屋さん（同年齢）の遊びでの発展の在り方等、また年長児（異年齢）での遊びの展開（まごトの場面、レストランごっこの場面）で、遊びを楽しむ自然な方法をどのように持つて行くのが良いか問題提起できましたね。

自発的に発展した事例（おでかけ、ディズニーランドごっこ）の事例は、年下、年上に関係なく遊びが広がっていくことを見いだした分析で意味のある研究になりました。まとめとしての「異年齢との交流での遊びの役割」に触れたこと、そして「発達」に添った遊びの大切さを結論で述べてくれた、遊びの環境づくり、その環境をどのように使うか（如何に使うか）、子どもの興味性など発達に添ったことの重要性の考察を、とてもまとまっています。これからの研究を期待しています。

本報は年少児の遊びについて、子どもたちの出会いや発達、一人遊びから集団遊びへの展開を追いながら、遊びを通した子どもたちの育ちについて検証した実践報告である。

遊びをテーマにした実践研究は数多いが、定義が曖昧かつ抽象的で対象範囲も広範のため、ともすると現場の実践の単純な記述や一般的な定義の反復に終始しがちである。これに対して、筆者らは遊びの広がりに着目することで問題の焦点を絞り、実践を通して自分なりの考察を導き出すことに成功している。具体的には、「一人ひとりが自分の好きな遊びを満足するまでできる環境作り」→「コーナー遊びを中心として友だちと関わる楽しさ」→「一人の遊びから複数での遊びへ」→「異年齢交流」という4段階のステップを仮定し、各段階における遊びの広がりプロセスを環境設定と子どもたちの遊びの様子に主眼を置いて可視化しようとした取り組みが評価できる。

研究のまとめにおいても「一人遊びが中心だった年少児が「たのしいな」「もっとやってみたい」という自発的な思いをもつきっかけとなったのが年長・年中児との関わりであった」と述べられているように、異年齢交流による遊びの広がりとそのダイナミズムは常に、私たち保育者にとって魅力と不思議に溢れたものである。本実践においても、そうした保育者の関わりと子どもたちの反応や応答の事例を具体的に収集することで、研究のさらなる深化が期待できる。特に、上述の4段階における遊びの広がり事例をそれぞれ現場の保育者の生き生きとした視点で丁寧に拾い上げ、段階を追って時系列でまとめることにより、現場実践においても遊びの研究を志す研究者にとっても、より価値ある実践研究事例となるであろうことが予想される。今後の研究の継続と深化に期待したい。

## 報告奨励賞

### 課題研究④ 遊びと環境について

#### 『遊びと環境について』

西濱 裕子（山鳩保育園・京都府支部）

---

### 講評：庄司 順一

---

研究の目的は「子ども達の毎日の環境が音楽リズムと密接に関係していると考え、活動内容を調査し、まとめてみた」ということのようにですが、報告の中で、どこが活動内容を調査した部分なのかがわかりません。

5 ページにおよぶ文章が一つの見出しもなく、いつの間にか別の話題になっていくので、読むのがむずかしいです。何を伝えようとしたのか「目的」を明確にすることが必要でしょうし、少し細かく見出しをつけると、言いたいことが明確になると思われます。何も知らない人に読んでもらい、感想を聞くと、報告のまとめ方や内容についても示唆を得られると思います。

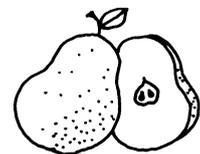
保育内容については、ここで実践されていることと私は少しちがう考えをもっています。たしかに姿勢は大事だと思いますが、「姿勢」と言われただけで正しい姿勢になる、というのは何か号令保育のようにも感じてしまいます。子どもが保育者の指示に従うことと、子どもの自発性を尊重することのバランスが大事だと言えるのかもしれませんが。

音楽は大事だと思いますし、子どもの行動を音楽との関係でとらえようとするのは興味深いことです。今回まとめられたことを、もう少し整理してまとめなおされることを期待します。

この研究は、保育士も子ども達にとって大切な環境の一部としての役割を担っているとの認識から、保育所で行われている活動内容を記載したものである。

現在社会の中では限られた身体機能しか使わない室内遊びが多く、子どもの体力や運動機能が低下していることから、保育者が積極的に課題を設定した内容で保育を行うことが、子どもの発達・成長に必要であるとの視点から様々な手法が述べられていた。乳児段階から舌や口周辺の動き、腹式呼吸の意識付けを行ない、正しい姿勢を身につけることが日常生活の全てに必要との認識から、座り方や歌う姿勢の細部について一つ一つ形を指定して身につけさせることが集中力を高め、自主性や自信につながるとしており、保育現場で行われている活動の多様性を改めて感じさせられた。

研究としては、行った活動内容の記述に種別・対象年齢等での整理が必要であると思う。また、行った活動のどの部分が何について効果があったのか、設定された保育と遊びの違いが明確にされておらず、結果として全体的に不明確との印象を受けてしまった。



## 報告奨励賞

自由研究 『保育現場におけるカウンセリングアプローチの試み』

廣田 敬乃（中居林保育園・青森県支部）

## 講評：野坂 勉

保育現場にカウンセリングの導入を主張する、問題提起的な報告である。

### 1. カウンセリング実践の逐語記録

この児童が、いかなる施設で処遇され、カウンセリングが実施されたかは不詳である。結果として、乳幼児保育の目的施設である保育所における研究活動の資料とはみなされなかった。

### 2. カウンセリングの導入問題

カウンセリングを導入する必要性が高いと考えられるのは

#### ①保育士の現任研修

保育士は児童の保育と併せて「児童の保護者に対する保育に関する指導（児童福祉法18条の4の後段）」を行うことを業とする保育専門職の職務能力として、カウンセリングの技術を習得する事は、有用である。現任研修の科目に位置づけられ、充実すべきであろう。

#### ②地域子育て支援センターの事業実績

センター事業は「子育て」に関する相談助言の実際を支援する体制としたスーパービジョンを必要とした。「地域子育て指導者」、「担当者」はスーパービジョン機能を果たすためには、カウンセリングは基礎技能として習得している事が必須とされた。においてである。

### 3. 研究報告としての要件

実践研究にあっては、保育現場を対象として、改善、向上策をさぐる事が望まれる。なお、いわれてきた学童保育は、児童福祉では放課後児童健全育成事業（児童福祉法6条の2・2項）として規定する。保育所に付設された児童館も絶対数は少なく限られているとみられ、保育所のキャパシティをこえているのが、実情である。

本報は、カウンセリングマインドを持つ保育者による「保育カウンセリング」に注目し、保育ニーズの多様化と保育者への社会的要請の拡大への対応に追われる現場の問題意識の明確化と解決策の示唆を目的とした実践研究である。

少子化をはじめとする社会問題の深刻化と保育を取り巻く環境の変化は、私たち保育者にもさまざまなサービス提供を要請し始めている。そのひとつが虐待やネグレクト、親の離婚などに端を発する心の病気や、軽度発達障害の問題への対応である。子どもの問題のみならず、親を含めた日常的で包括的な育児支援の提供を求められる現場の保育者にはカウンセリングマインドやスキルが求められる。本研究は実際に、保育士の資格を持つ常駐のカウンセラーが保護者や子どもの問題に随時介入し、必要に応じて個別のカウンセリングを取り入れながら問題解決を図るとともに、保護者や子どもとの信頼関係を前提に乳幼児期ならびに児童期の各発達課題の達成を支援し、個々の問題解決能力を高めることを目的としている。

研究方法において言及されているように、保護者との信頼関係の深化や問題解決には保育者間に共通の問題意識と統一的な取り組みが不可欠である。「保育者へのカウンセリング技術を応用した対応スキルのレクチャー」など、保育現場におけるカウンセラーの役割は単に保護者や子どもへの対応に固定化されたものではない。連絡ノートや懇談会など日常の機会を利用した保護者との信頼関係構築の手法を含め、具体的な事例とともに考察を加えることで、より説得力のある研究成果が期待できる。

多様化する保育ニーズを背景に、保育現場におけるカウンセリングアプローチの重要性は今後も一層増大するものと思われる。保育現場の課題解決を図る実践的試みとして、今後の継続研究に期待したい。

## 報告奨励賞

自由研究『心と心のふれあいを深める思いやりの輪—思いやりを引き出す関わりを通して—』

玉城 久美子（愛心第2保育園・沖縄県支部）

---

## 講評：庄司 順一

---

研究の目的は、「思いやり保育を実践する中で、子ども達の“思いやり”を見つけ、引き出すことにより得られる多くのことが、日々の保育の糧になり、それらの思いやりを個々の人格形成の土台につなげること」だということです。ややあいまいに思えますが、それでも何を明らかにしたいかという問題意識は示されています。

園の概要を述べ、そのあと実践方法として、これまでの思いやり保育についての園での取り組みを紹介しています。そして、これをふまえて、事例を検討し、考察し、まとめと課題も述べられていて、研究報告として形式的にはよく整っています。内容に関して、「思いやり」のとらえ方、育み方にはちがう考えもあるかと思いますが、この研究をとおして伝えようとしたことは分かります。

残念なことは、4事例についての記述で、「児童の実態、保育士の対応、その後の変化」という項目で紹介されていますが、それぞれ3～5行程度で、その記述が簡単にすぎることです。たとえば「保育士の対応」で、どんなことばで褒めたのか、どういうことばをかけたのかなどを具体的に書いていただけると、他の園での取り組みにも参考になるでしょう。

本報は昨年度からの継続研究である愛心保育園に引き続く、「思いやり保育」の実践に関わる継続報告である。

近年の社会状況や子育て不安の蔓延を背景に、「思いやりのある子どもに育てること」に対する保護者や社会の要請は年々高まりを見せている。しかしながら、思いやりという抽象的で一般的な概念を現場実践に反映するためには、相応の実践理論や実践者の明確な意図が必要であることは言うまでもない。本研究においては、「手伝う、助ける、励ます」の3つの具体的行動の習慣化を目指し、「人格形成の土台をつくる最も重要な乳幼児期に」思いやりを育むことを目標とした一連の保育実践を思いやり保育と位置づけ、これを保育および園内研修の柱とした2年間にわたる取り組みの成果をケースごとにまとめることで、その全体像を浮き彫りにしようとした筆者らの努力がうかがわれる。

抽象的なテーマでの実践研究はともすると一般論の繰り返しになりがちであるが、本研究では子どもたち一人ひとりの実態や保育者の対応、その後の変化の考察と、「思いやりファイル」と名付けられた一連のクラスファイルや連絡ノートを通した保護者との連携などの豊富な具体例をもとに、現場の生き活きとした実践を分かりやすく伝えている点も評価できる。本報での事例は個別の園児に対する実践事例に留まるものであるが、引き続き、異年齢を含めた子ども同士の関わりやクラス単位での思いやり保育実践についても具体的な取り組みの経過を含めた事例紹介をまとめることで、より一層説得力のある実践報告が期待できるものと思われる。

実践研究における事例データの収集は、実践者の明確な問題意識に基づく日々の地道な努力の積み重ねに裏付けられたものである。今後も引き続き実践を継続し研究の深化を図られるとともに、さらに説得力のある実践報告を期待している。

## 第4回 保育所保育実践研究・報告集

平成22年6月30日

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5丁目53番1号

TEL 03-3486-4412 (代)

FAX 03-3486-4415

